

県営ほ場整備事業（久米地区）に伴う
試掘確認調査報告書

県営ほ場整備事業（久米地区）に伴う試掘確認調査報告書

津山市教育委員会

2010
津山市教育委員会

県営ほ場整備事業（久米地区）に伴う試掘確認調査報告書

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 80 集

2010

津山市教育委員会

序

津山市久米地域は市西部の田園地帯で、地域のシンボル的な遺跡である岩屋城跡や久米廃寺跡、美作地域でも有数の規模をもつ奥の前1号墳など、多数の遺跡が存在する地域としても知られているところです。

本報告書は、県営は場整備事業実施に先立ち、埋蔵文化財保護のための資料を得ることを目的として、平成17年度～19年度にわたり国庫補助事業として実施された試掘・確認調査の調査報告書であります。

限られた範囲の調査ですが、これまで遺跡の存在が認められていなかった場所に新たに遺跡が確認されるなど、新しい資料を調査によって得ることができました。

本書は小冊子ですが、地域史研究の一助となっていたければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行まで多大なご支援をいたしました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成22年3月25日

津市教育委員会

教育長 藤田長久

例　　言

1. 本書は、県営ほ場整備事業（久米地区）に伴う試掘・確認調査の報告書である。
2. 試掘・確認調査は、国庫補助事業（市内遺跡発掘調査等事業）として平成17年度～19年度に津山市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は津山市教育委員会が担当し、津山市教育委員会文化財課（津山弥生の里文化財センター）職員仁木康治が担当した。
4. 本書の執筆は調査担当者が行った。また、編集は津山市教育委員会文化財課（津山弥生の里文化財センター）職員平岡正宏が行った。
5. 本書に用いた方位は磁北で、レベル高は海拔高である。実測図に示した高さの単位はmである。
6. 遺構実測図の土層注記の表示に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財團法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』(2004年度版)に準拠している。
7. 出土遺物及び図面類は、津山弥生の里文化財センター（津山市沼600-1番地）に保管している。
8. 本書の全てのデータはPDFフォーマット及びAdobe IndesignCS4形式で保管している。

目 次

第1章 調査にいたる経過と調査体制	1
第2章 油木北地区試掘確認調査	5
1. 調査位置と周辺の遺跡	5
2. 調査経過	6
3. 調査の方法と調査概要	6
4. まとめ	9
第3章 宮部地区試掘確認調査	15
1. 調査位置と周辺の遺跡	15
2. 調査経過	16
3. 調査の方法と調査概要	18
4. まとめ	29
第4章 中北下地区試掘調査	33
1. 調査位置と周辺の遺跡	33
2. 調査経過	34
3. 調査の方法と調査概要	34
4. まとめ	38

挿図・表目次

- 第1図 津山市位置図
- 第2図 調査地および周辺遺跡分布図 (S=1/20,000)
- 第3図 トレンチ配置図 (S=1/3,000)
- 第4図 トレンチ平・断面図（1） (S=1/80)
- 第5図 トレンチ平・断面図（2） (S=1/80)
- 第6図 出土遺物 (S= 1 / 2)
- 第7図 調査地および周辺遺跡分布図 (S=1/20,000)
- 第8図 トレンチ配置図 (S=1/8,000)
- 第9図 トレンチ平・断面図（1） (S=1/80)
- 第10図 トレンチ平・断面図（2） (S=1/80)
- 第11図 出土遺物（1） (S=1/4)
- 第12図 トレンチ平・断面図（3） (S=1/80)
- 第13図 トレンチ平・断面図（4） (S=1/80)
- 第14図 トレンチ平・断面図（5） (S=1/80)
- 第15図 トレンチ平・断面図（6） (S=1/80)
- 第16図 出土遺物（2） (S= 1 / 4)
- 第17図 新規発見遺跡範囲図（1）
- 第18図 新規発見遺跡範囲図（2）
- 第19図 新規発見遺跡範囲図（3）
- 第20図 調査地および周辺遺跡分布図 (S=1/20,000)
- 第21図 トレンチ配置図 (S=1/3,000)
- 第22図 トレンチ平・断面図 (S=1/80)
- 第23図 出土遺物 (S= 1 / 2)

図版目次

- 図版1 油木北地区試掘確認調査
調査位置遠景（南から）
トレンチ1（南西から）
トレンチ2（南西から）
トレンチ3（南から）
トレンチ4（東から）
- 図版2 トレンチ5（北西から）
トレンチ6（南から）
トレンチ7（北から）
トレンチ8（西から）
トレンチ9（北東から）
トレンチ10（南東から）
トレンチ11（南東から）
トレンチ12（南西から）
- 図版3 トレンチ13（南東から）
トレンチ14（北西から）
トレンチ15（北西から）
トレンチ16（北西から）
作業状況（1）
作業状況（2）
- 図版8 宮部地区試掘確認調査（19年度）
藤地区調査位置全景（西から）
日吉地区調査位置全景（南西から）
- 図版9 川原寺地区調査位置全景（西から）
トレンチ1（北から）
トレンチ2（南西から）
トレンチ3（西から）
トレンチ4（北から）
- 図版4 出土遺物
- 図版5 宮部地区試掘確認調査（18年度）
尾添地区調査位置全景（北から）
藤地区調査位置全景（東から）
- 図版6 トレンチ1（北東から）
トレンチ2（東から）
トレンチ3（東から）
トレンチ4（北から）
トレンチ5（西から）
トレンチ6（南から）
トレンチ7（南から）
トレンチ8（東から）
- 図版7 トレンチ9（東から）
トレンチ10（北から）
トレンチ11（南東から）
トレンチ12（南東から）
トレンチ13（東から）
トレンチ14（西から）
トレンチ14ピット掘下げ状況（西から）
トレンチ15（西から）
- 図版10 トレンチ5（東から）
トレンチ6（北東から）
トレンチ7（南西から）
トレンチ8（南東から）
トレンチ9（南西から）
トレンチ10（南東から）
トレンチ11（北東から）
トレンチ12（北東から）
- 図版11 トレンチ13（東から）

トレンチ14（東から）	トレンチ22ピット掘り下げ状況（南東から）
トレンチ15（北西から）	トレンチ23（西から）
トレンチ16（北東から）	トレンチ24（南西から）
トレンチ17（南から）	トレンチ25（南から）
トレンチ18（北東から）	作業状況1
トレンチ19（北西から）	作業状況2
トレンチ20（北東から）	
	図版13 出土遺物（1）
図版12 トレンチ21（北西から）	図版14 出土遺物（2）
トレンチ22（北西から）	
図版15 中北下地区試掘調査 調査位置全景 (北西から)	図版16 トレンチ5（北から） トレンチ6（西から） トレンチ7（南東から） 作業状況 出土遺物
トレンチ1（東から）	
トレンチ2（東から）	
トレンチ3（西から）	
トレンチ4（北東から）	

第1章 調査に至る経過と調査体制

1. 調査に至る経過

津山市久米地域は、市域西部を流れる吉井川以西の地域を指し、旧久米郡久米町の行政区に該当する。この地域の主要産業は水田耕作を主体とする農業であるが、中小規模な水田が多数であり、経営規模の拡大等が必要とされたことから、県営は場整備事業等の計画（経営体育成基盤整備事業及び中山間地総合整備事業）が企図された。

このことに伴い、事業実施予定地についての埋蔵文化財包蔵地にかかる事前の照会がそれぞれの事業担当部局からなされた。

津山市教育委員会は、遺跡地図との照合及び現地踏査を行い、その成果からこのうち3ヶ所（本書記載の3事業位置）について試掘あるいは確認調査が必要な旨の回答を行った。引き続き、当該個所の取り扱いについて協議を行った結果、いずれの場所についても工事着手前に試掘・確認調査を実施することで合意した。

事前の調査が必要と判断された事業位置（団地）については、工事実施計画と年次ごとに調整のうえ、国庫補助事業として対応することとした。その事業別内訳は、中山間地総合整備事業が2事業（平成17年度及び19年度）、経営体育成基盤整備事業が1事業（平成18～19年度）である。年度毎の調査実施時には、各年度別の調査計画について、事業担当課と調整を年度当初に行った上で実施時期等を決定し、次いで地元協議等を行って調査に対応した。

なお、各調査区分別の調査経過については、それぞれの該当部分を参照されたい。

2. 調査体制

本書記載の発掘調査は、全て津山市教育委員会が国庫補助事業として実施した。年度別の調査体制は次の通りである。また、平成21年度については発掘調査報告書作成業務を行った。

なお、本市における文化財保護担当部局は、平成20年4月の組織改編に伴い、旧文化課から芸術文化関係業務を市長部局に移管し、文化財保護担当部局として文化財課に改組されている。

平成17年度

津山市教育委員会

教育長 神崎博彦
文化課長 佐野綱由

弥生の里文化財センター
所長 中山俊紀
次長 行田裕美
主任 仁木康治（調査担当）



第1図 津山市位置図

平成 18 年度

津山市教育委員会

教育長 神崎 博彦 (～H18.4.21)
藤田 長久 (H18.5.1～)
文化課長 佐野 紗由 (～H18.12.31)
濱 哲夫 (H19.1.1～)

弥生の里文化財センター

所長 中山 俊紀
次長 行田 裕美 (～H18.12.31)
下山 純正 (H19.1.1～)
主任 仁木 康治 (調査担当)

平成 19 年度

津山市教育委員会

教育長 藤田 長久
文化課長 濱 哲夫

弥生の里文化財センター

所長 中山 俊紀
次長 下山 純正
主任 仁木 康治 (調査担当)

平成 21 年度

津山市教育委員会

教育長 藤田 長久
文化財課長兼
弥生の里文化財センター所長
行田 裕美

弥生の里文化財センター

次長 小郷 利幸
主任 仁木 康治 (整理担当)

整理作業は文化財センター野上恭子、岩本えり子、家元弘子、田渕千香子が担当した。

また、発掘作業にあたっては、財団法人津山市シルバー人材センターに委託した。発掘作業に従事していただいた方は次のとおりである。

山本栄造 黒瀬福雄 上原次男 (故) 高木太二 森 一郎 村上瑛幸 (故) 田村康雄
森次平也 國米信行 野條 博 宮本保利 松尾 稔 田村光暉 石井 治 森藤和三
郎

(順不同 敬称略)

なお、調査実施から報告書作成にあたり、文化財センター職員各位及び以下の団体・個人の協力を得た。記してあつく御礼申し上げます。(いずれも順不同 敬称略)

(油木北地区)

山田哲太郎 田村榮一 村上ひさ 平井賢市 村上頼郎 村上定宏 武本吉正

(宮部地区)

萩木美和 松尾正美 松尾賢一 松尾官治 萩木農仁 松尾茂広 桶口昭二 谷口安明
宮岡光男 国木 速 萩木秀實 池田守男 押目 彰 萩木 稔 中元 勇 萩木弥六
中元勝弘 萩木秀也 岡安輝雄 黒田勇馬 藤木 始 黒田 博 岡安光代 井汲誠作
井上克彦 井上須満子 藤木富吉 藤木一實 萩木静成 岡田道子 萩木欣也 松岡保
治 松尾和義 中元経美 藤堂正幸 藤木春幸

(中北下地区)

重松 確 重松秀明 松永榮一 重松克全 佐々木靖昌 實成正一

(以上地権者)

岡山県教育府文化財課 岡山県美作県民局農村整備課 同 農地整備課 津山市農林部農村整備課 津山市地域振興部久米支所産業課

第2章 油木北地区試掘確認調査

1. 調査位置と周辺の遺跡

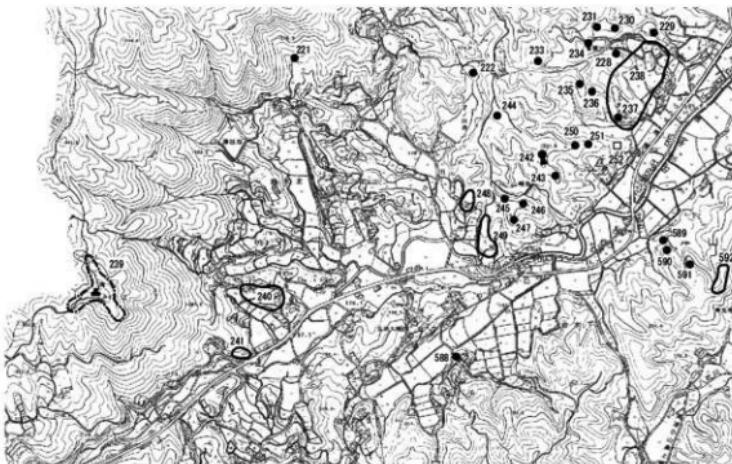
調査地は、津山市の南西端である油木北地区に所在する。この地区は、概観すると津山市・久米郡美咲町境をなす山塊から東向きに開けた谷地形を示す。低位部を吉井川支流である倭文川が東流し、それに沿うようなかたちで国道429号線が東西に走っている。倭文川の流域では上流から一部中流域に属し、現在では水田造成等の改変行為によりやや変化しているものの、地形そのものとしてはかなり急峻であるといえる。

調査地周辺では、概ね縄文時代から中世に至るまでの遺物・遺跡の所在が知られている。

縄文・弥生時代では、隣接する油木下地区から乳棒状石斧が出土しており^{注1}、縄文時代の遺物であるとみなされている。弥生時代中期の遺跡とされる奥の前A遺跡(248)では竪穴式住居址や柱穴が確認されている。また、詳細な時期は不明であるものの、奥の前B遺跡(249)をあげることができる。なお、同遺跡では土師器が採取されていることから、古墳時代の遺構が所在する可能性もある。

古墳時代になると、この地区でも古墳時代中期～後期にかけての古墳が確認されている。中でも、墳長65mを測る前方後円墳である奥の前1号墳(242)が突出する。奥の前1号墳は、長持形石棺を内部

注1 村上幸雄・橋本聰司 「稼山遺跡群Ⅰ」 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1979年



221 蛇谷古墳 222 斎の谷古墳 228～231 藤藏池1～4号墳 233 藤藏池6号墳 234 藤藏池頭古墳 235～237 稲田1～3号墳 238 藤藏池道路 239 高山城跡 240 山口B遺跡 241 山口A遺跡 242～247 奥の前1～6号墳 248 奥の前A遺跡 249 奥の前B遺跡 250～251 東段ノ下1～2号墳 252 大鳴中世墓 588 油木下奥古墳 589～591 油木丸山1～3号墳 592 貞光寺裏土壤基群

第2図 調査地および周辺遺跡分布図 (S=1:20,000)

主体とし、4世紀後半の築造とみられている埴輪を伴う首長墓である^{註2}。本墳の周辺の尾根上には、径約10～18mを測る円墳5基（243～247）が確認されている。また、蛇谷古墳（221）は径11mを測り、標高250m付近の谷部に単独で所在する古墳で、内部主体は横穴式石室で石室奥壁部分が露出している。斎の谷古墳（222）は、横穴式石室のみ残存する古墳である。般田1号墳（235）は径約15m、高さ約2mの円墳で、陶棺を伴う横穴式石室を内部主体とし、銅碗が出土したことから古墳^{註3}である。般田2～3号墳（236～237）は径約9m、高さ約2mのほぼ同様の規模の円墳である。油木下裏古墳（588）は尾根上に単独で所在し、須恵器が出土したとされるが、消滅しており詳細はよくわからない。なお、散布地とされる山口A遺跡（241）、山口B遺跡（240）では、古墳時代の須恵器片が表露され、付近では陶棺片も確認されているため、古墳が所在した可能性が高いが^{註4}、本地區のみで考えるならば、前期古墳が現時点で皆無であるなどの状況を考慮すると、古墳の総数としてはさほど多くはないと思われる。古代には、この地域は久米郡倭文郷に属したと考えられるが、それを具体的に物語る考古的資料は皆無である。そして、中世においては、津市・久米郡美咲町境をなす高山に高山城（239）が築城される。高山城は、江原親次の築城によるとされ、津市福田から美咲町西川に至る交通路を押さえる位置に築城されたと考えることができる。

以上、油木北地区は倭文川流域のなかでは上流域に属し、比較的遺跡密度の低い地域であるといえる。

2. 調査経過

中山間地域総合整備事業（久米地区）に伴い、は場整備事業が予定されている油木北団地予定地は、周知の遺跡 山口B遺跡の遺跡範囲ほぼ全てに該当する。

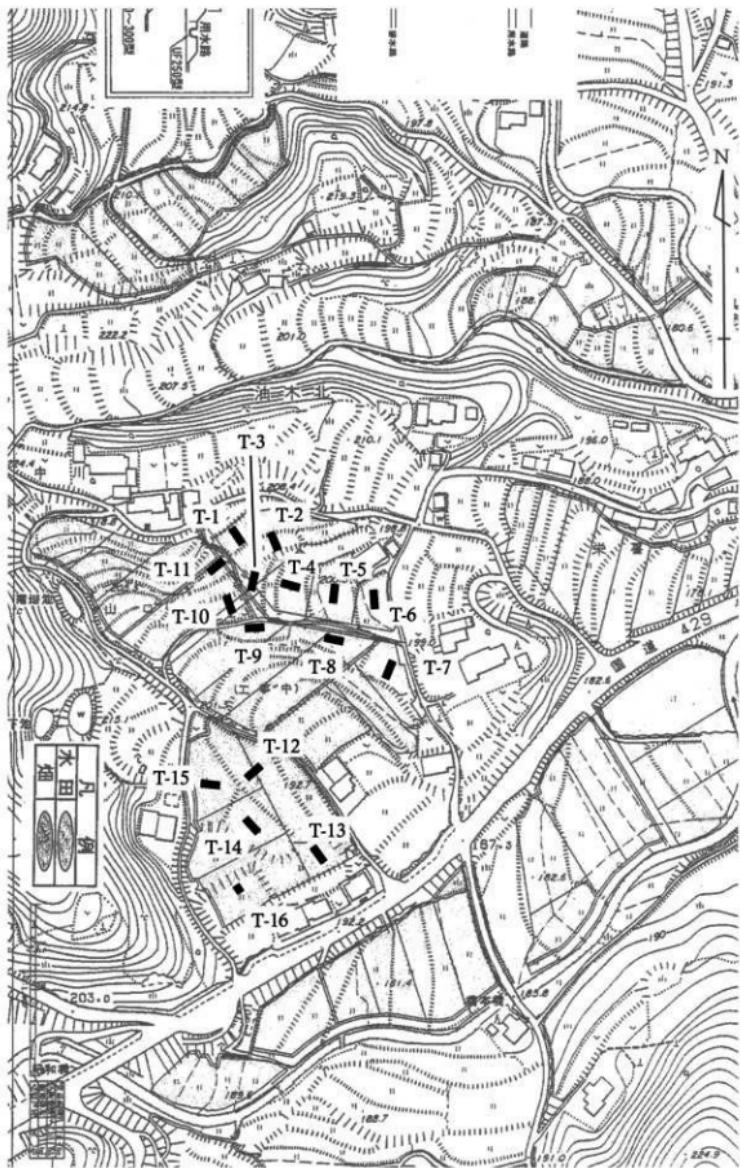
このため、は場整備事業との調整を行なうため、遺跡の有無及び内容、また遺跡範囲の確認を目的として事前に確認調査を実施することで協議をおこない、実施時期については、事業対象面積等から工事実施前年度に単年度事業で実施することで合意した。

以上により、事業担当課と年次別事業の調整をおこない、油木北団地分については、平成17年度事業として確認調査に対応した。調査面積は160m²で、調査期間は平成17年12月5日～平成18年1月31日である。なお、山口B遺跡の遺跡範囲には含まれていないものの、隣接する尾根上についても工事施工範囲となっており、隣接する山口A遺跡との関連から対象に含めて試掘調査を併せて実施した。

3. 調査の方法と調査概要

山口B遺跡は、倭文川左岸の南及び南東向きの尾根上に占位し、眼下に倭文川を臨む。低位部からの比高は15～30mを測る。調査前においては、古墳時代の散布地という認識がなされていた。調査前の対象地の所見は、ごく一部を除いて、多くの水田において大規模なマチダオシがおこなわれており、旧地形を推定することができるという程度の状況であった。

調査は、地形等を考慮のうえ任意の位置にトレーニングを設定し、人力により掘下げを行い、遺構の有無や種類あるいは時期を確認した。トレーニングの規模は2m×5mを基本として16ヶ所に設定し（第3図）、
註2 倉林真砂斗・澤田秀実ほか『美作の首長墳』「美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究」
2000年
註3 澤田秀実ほか『津市油木北般田1号墳の研究』「くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要 第42巻第2号』2009年
註4 確認調査の際に須恵器片を表露した。付近にある小祠には陶棺片が祀られており、聞き取りによると宅地造成の際古墳が破壊を受けたとのことである。



第3図 トレーニング配置図 (S=1/3,000)

実際の調査にあたっては、個々のトレンチにおいて調査状況により部分的なトレンチの拡張、縮小をおこなっている。また、対象とする尾根が2つにわかれているため、トレンチも大きく分けて尾根毎に東半（T-1～T-11、山口B遺跡の遺跡範囲）、西半（T-12～T-16、関連調査範囲）として設定した。

発掘調査終了後は、調査対象地が次年度耕作予定であり、一部に水田基盤が非常に脆弱な状況も見受けられたことから、プレートランマ他の機材を使用して入念に埋め戻し作業を行い原状に復した。

各トレンチの概要を以下に述べる。

T-1（第4図）

耕土直下に基盤層を検出した。また、基盤層の検出状況から既に削平を受けているものと判断した。遺構は確認出来ず、遺物も耕土中から弥生土器、須恵器の細片各1点が出土したのみである。

T-2（第4図）

耕土下層にマチダオシ前の旧水田層、以下は自然堆積層である。掘り下げ状況から、地形的に谷部の中心にあたると判断された。遺構の確認はない。遺物は4層から弥生土器片が1点出土したのみである。（第6図1）

T-3（第4図）

耕土下層は現水田造成のためと考えられる造成土（粘土混じりの真砂土）で、下層は谷地形に伴う堆積と考えられる。遺構は確認できなかった。遺物は弥生土器、土師器、勝間田焼、白磁片、鉄滓が3・4層を中心に出土しているが、流れ込みと判断した。（第6図2～5）

T-4（第4図）

耕土下層は青灰色粘質土で旧耕土である。下層は自然堆積と考えられる青灰色粘質土で、谷地形に伴う堆積と判断した。遺構の確認はない。3層から須恵器片、4層から須恵器、土師器、磁器、近世～現代の瓦片、鉄滓などが出土しているが、T-3同様流れ込みと判断した。（第6図6）

T-5（第4図）

耕土下層は青灰色粘質土で旧耕土である。下層は黄灰色の粘質土で自然堆積と考えられる。地表から約80cmで基盤層を検出した。遺構は認められなかった。遺物は2～5層にみられ、古墳時代～中世の須恵器及び土師質の鍋片が出土した。（第6図7・8）

T-6（第4図）

耕土下層は青灰色粘質土で旧耕土である。下層は黄褐色若しくは黒褐色粘質土で、自然堆積と考えられた。遺構は確認できなかった。遺物は1層から須恵器、土師器片の出土をみている。（第6図9・10）

T-7（第4図）

耕土直下は基盤層である。基盤層の検出状況から既に削平を受けているものと判断した。遺構は確認出来なかった。遺物は1層から近現代の陶磁器片の出土をみたのみである。

T-8（第4図）

耕土直下に基盤層を検出した。また、トレンチ中央にごく浅い溝状の落ち込み、またビット状の深い落ち込みを認めたが、ごく最近のものと判断された。遺物は1層から須恵器及び近現代陶磁器の細片、2層から須恵器及び近世～現代の瓦片が出土した。（第6図11）

T-9（第5図）

耕土直下に現水田に伴う造成土があり、下層は基盤層である。旧水田の造成に伴い削平及び造成を受

けた状況が確認できたが、遺構は確認出来なかった。遺物は耕土から弥生土器の小片と近現代の陶器片が出土した。

T - 10 (第5図)

耕土以下は基盤層である。旧水田の造成に伴い削平を受けた状況が確認された。遺物は耕土から須恵器片が1点出土したのみである。(第6図12)

T - 11 (第5図)

耕土下層は青灰色粘質土～黄褐色若しくは暗褐色粘質土で、トレンチ北端では直下に基盤層が認められ、南に向かって急激に降下する状況が認められた。旧水田に伴う暗渠排水やブロック基礎に伴う搅乱が認められたが、トレンチ東半部分において数基のピットが確認された。ピットの時期は遺物から弥生時代及び近現代と判断された。遺物は各層から比較的多く出土し、前記のもの以外に弥生土器、須恵器、土師器、瓦質土器、擂鉢及び近世～現代の瓦片、鐵滓が出土している。(第6図13～16)

なお、T - 11 北側の斜面において、少量の弥生土器、古墳時代の須恵器片を表面採取した。須恵器片は比較的の遺存状況が良好であるので、併せて掲載する。(第6図20・21)

T - 12 (第5図)

耕土下層は暗灰色粘質土で、旧地表から40cmで基盤層を検出した。現在の水田造成に伴い大規模に搅乱を受けており、遺構は確認されなかった。出土遺物は耕土からの須恵器片3点である。(第6図17・18)

T - 13 (第5図)

耕土直下に基盤層が検出され、既に削平を受けている状況が看取された。遺構は確認されず、出土遺物も皆無である。

T - 14 (第5図)

耕土直下に基盤層が確認され、旧地形が変更され、既に削平を受けている状況を確認した。遺構は確認されなかった。遺物は耕土からの須恵器、陶器片が各1点である。(第6図19)

T - 15 (第5図)

地表から約1mで基盤層に至り、緩い谷地形を示す。遺構は確認されなかった。出土遺物は各層から弥生土器、須恵器、土師質土器片が少量、陶器細片が1点出土している。

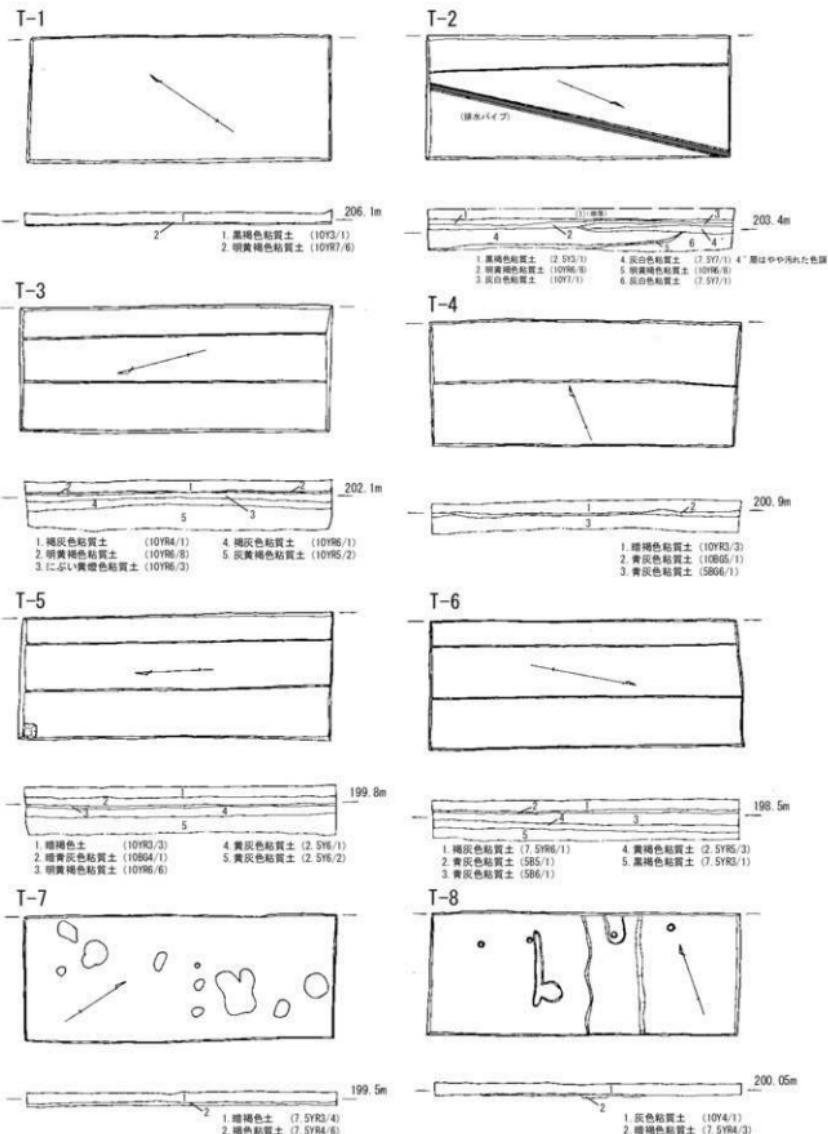
T - 16 (第5図)

耕土下層は暗青灰色・褐色・灰色粘質土で水分に富む。旧水田に伴う杭などが認められたが、遺構は確認されなかった。遺物は皆無である。

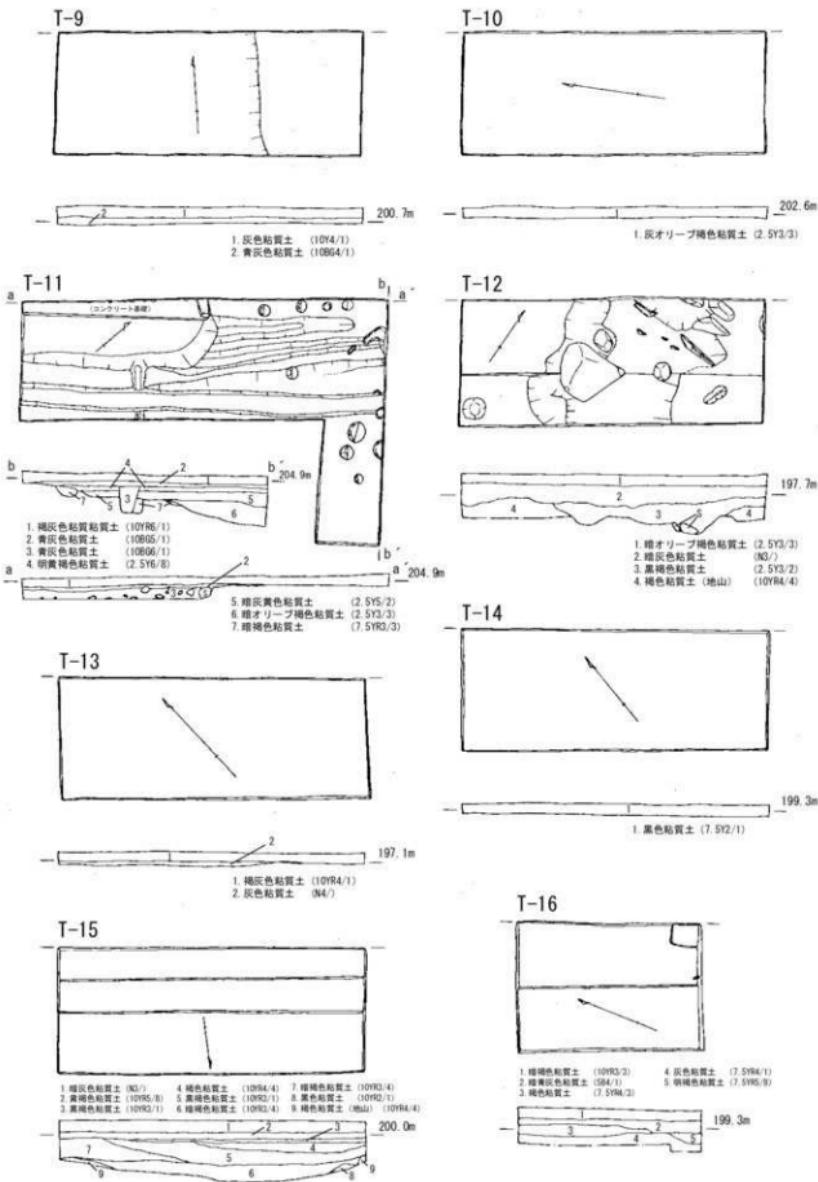
4.まとめ

本遺跡は、調査前においては尾根上に遺構の分布が推定されたものの、調査の結果遺構が確認されたのはわずかにT - 11のみであった。また、調査前からある程度予測されていたが、対象地全体が殆どの部分において小規模に地形が改変されていることが確認された。特に尾根頂部については削平が著しく、このことから遺構はT - 11付近を中心に、限定期的に極めて狭い範囲のみに存在すると判断され、遺跡範囲は当初の推定より狭い地域に限定されると判断され、遺跡の時代についても、古墳時代の遺構は確認することができず、遺構が認められた弥生時代に限られると思われる。

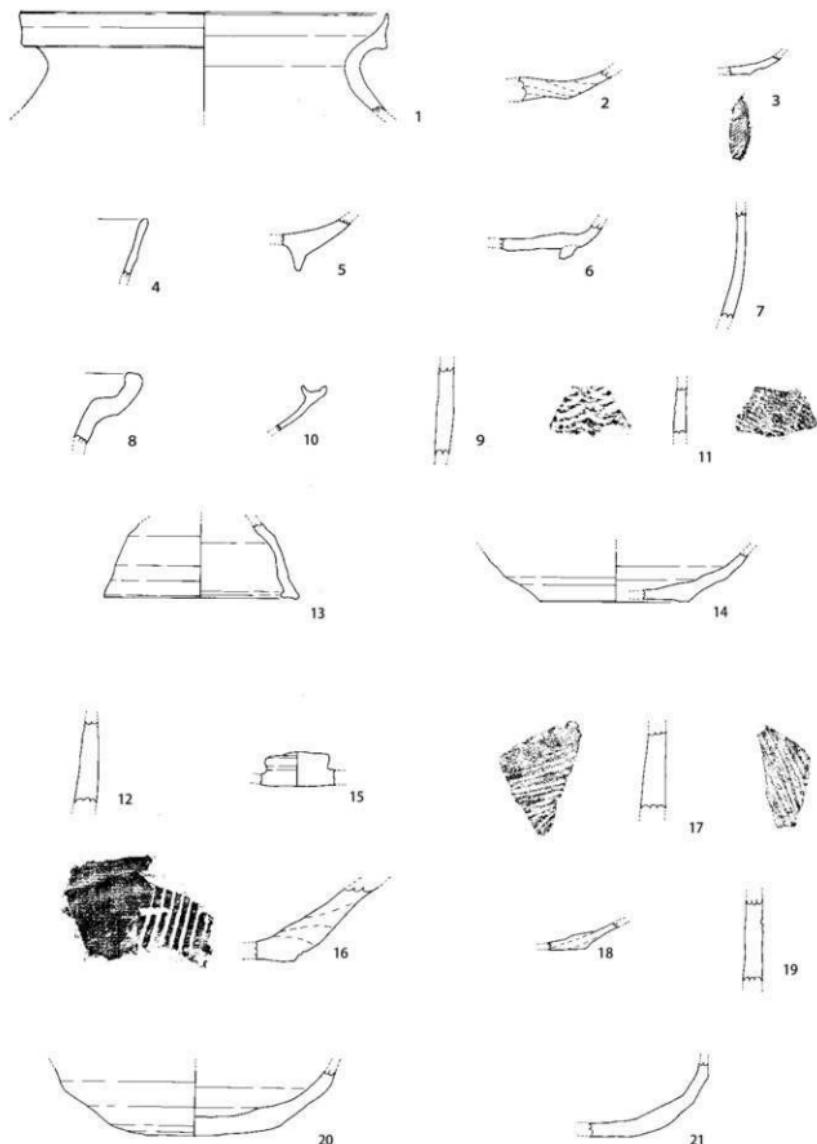
遺物からみると、出土遺物は弥生時代～近現代の範囲にわたるが、多くは古墳時代～中世の遺物が多



第4図 トレンチ平・断面図 (1) (S=1/80)



第5図 トレンチ平・断面図 (2) (S=1/80)



第6図 出土遺物 (S= 1/2)

数を占めた。調査中、T - 11 付近で古墳時代の遺物が狭い範囲で表採されたことから、水田等の造成以前に T - 11 付近、あるいはより上位に古墳等が所在したことを推測できると思われる。中世の遺物についても、今回の調査対象地において遺構の確認は出来なかったが、地形的にみても調査地に遺跡が存在したか、あるいは付近に遺跡の所在する可能性を示唆することができると考えられる。

なお、山口A遺跡との間の西側尾根上については、地形的な条件からの制約が多いにしても、遺物の出土状況からみると、かつて何らかの遺跡が所在した可能性は高いとみることができるのではないかと推測される。

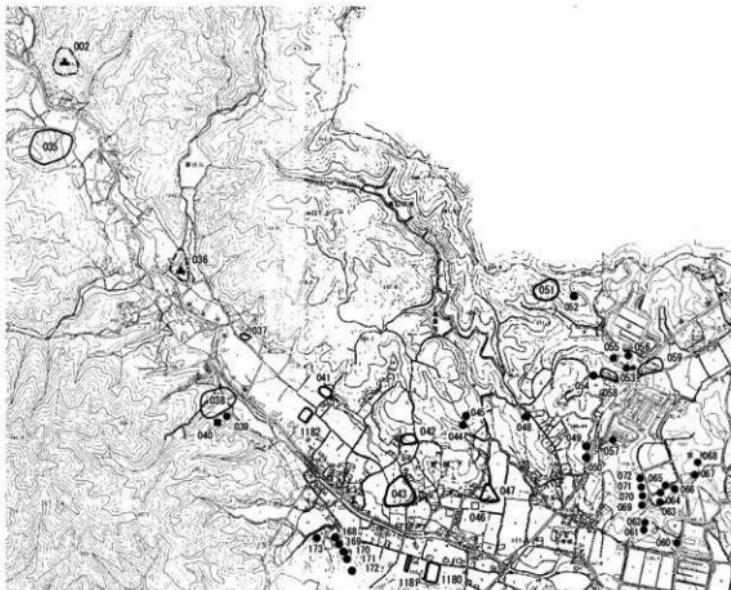
第3章 宮部地区試掘確認調査

1. 調査位置と周辺の遺跡

津山市宮部地区は、津山市久米地域の中北部に位置する。北を苦田郡鏡野町に接し、宮部上・宮部下の大字に分かれる。この地区は、北の妙見山（567.4m）や矢倉山（659.5m）、西の高見山（444m）から派生する尾根に挟まれた窪地状の谷地形を示し、最低位部を久米川の支流である宮部川が北西から南東方向に流れ、これに沿ってごく狭小な沖積平野が開けている。

調査地周辺において、遺跡が認められるのは弥生時代からである。日吉遺跡（037）は宮部川左岸の段丘上にあり、サスカイトが表採されている^{註1}（註1）。平遺跡（035）、王子遺跡（038）は宮部川右岸の段丘上の緩斜面にあるもので、平遺跡では弥生土器、王子遺跡では弥生土器、磨製石斧、石包丁などが表採されている。足田口A遺跡（058）でも弥生土器・須恵器の散布が確認されているが、いずれに

註1 「改訂版 岡山県遺跡図鑑」 岡山県教育委員会 2003年 以下、記述についてはこれに従っている。



しても大規模な集落を想定することは困難かと思われる。

古墳時代になると、この地域でも主として尾根上に多くの古墳が確認されている。鼓打1号墳（044）は径13m程度、同2号墳（045）は径4.5mの円墳と見られる古墳である。伏尾1号墳（048）は径8m、同2～3号墳（049～050）は径12m、高さ1.5～1.6m、深峪池古墳（052）は径9m、高さ0.6mの低平な墳丘をもつ。足田口1～5号墳（053～057）は径9～16mを測り、埴輪や須恵器などの出土記録があるが、すでに消滅したものもあり、詳細については不明な点が多い。なお、5号墳においては主体部のみ調査されている^{註2}。農試1～13号墳（060～072）は方墳2基、円墳11基から構成される古墳群である。弥勒寺1号墳～6号墳（168～173）は、丘陵性山地の頂部に所在し、いずれも径約5m～9m程度、高さ1m程度までの規模をもつ。王子古墳（039）も同様で円墳と考えられるが、墳丘はほとんど流出しており詳細はわからない。また、深峪池遺跡（051）、足田口B遺跡（059）はいずれも散布地とされているが、消滅古墳の可能性が高い。集落遺跡としては、一本木遺跡（041）は、古墳時代及び中世、曾根遺跡（043）、陽遺跡（047）は古墳～平安時代が考えられており、いずれも須恵器・土師器片が表採されている。

古代～中世では、金屋遺跡（042）においては奈良時代～室町時代が想定され、須恵器・土師器・備前焼片が遺物としてあげられる。これらの遺跡は、それぞれ低地を見下ろす尾根上もしくは丘陵上に所在する。また、王子古墓（040）は平安時代から室町時代、陽中世墓（046）は室町時代と考えられるもので、微高地に五輪塔が所在する。

城館遺跡としては、城山城跡（002）および宮ノ上城跡（036）がある。城山城跡は、松ヶ仙山塊から延びる尾根の頂部を削平して曲輪が設けられたもの、宮ノ上城跡は、日吉神社裏山の山頂部分を削平した城郭化したものである。なる。ともに上下2段の曲輪から構成され、西方の岩屋城との関連が考えられる城郭である。

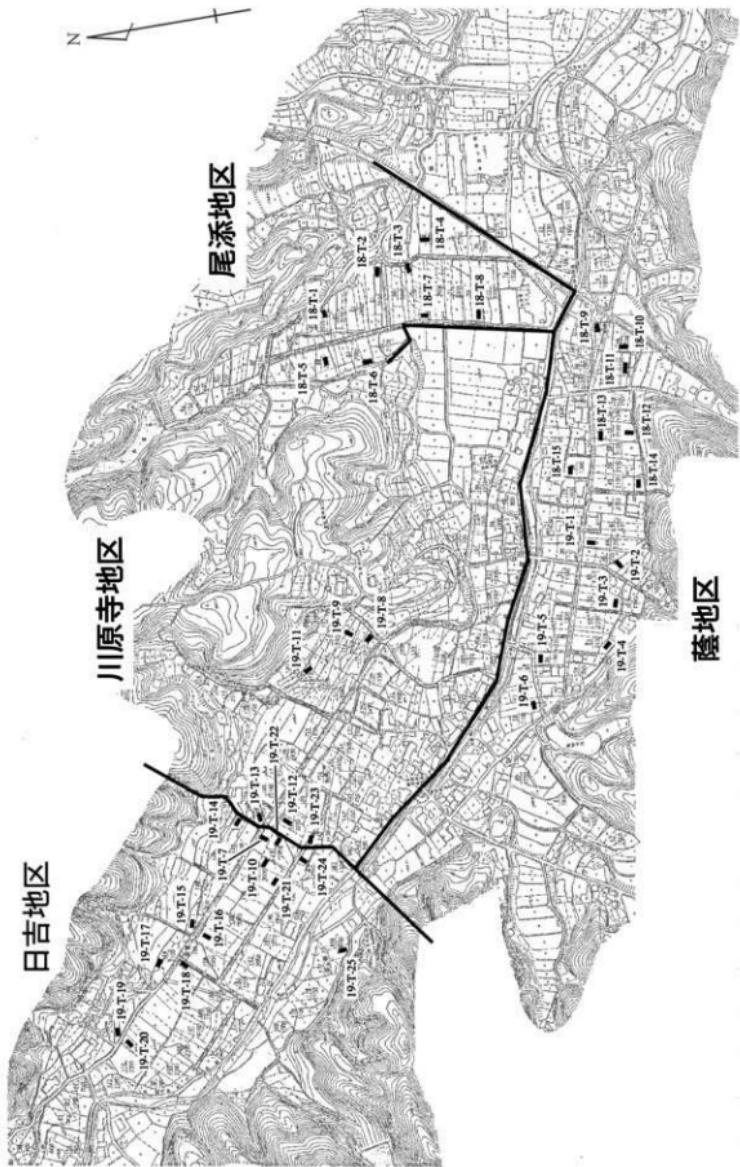
以上列記したが、宮部地区は宮部川を中心とした谷地形の辺縁部に各時期の遺跡が点在する状況を示し、概して小規模で詳細が不明な点も多く、遺跡密度も低い地域とみることができる。

2. 調査経過

経営体育成基盤整備事業（県営は場整備事業）計画が採択された宮部地区については、事業対象地が広範囲に渡ることから、津山市教育委員会は事業予定地内を対象に詳細な分布調査をあらかじめ実施した。その結果、比較的広範囲で弥生土器・須恵器片等の遺物が表採され、集落遺跡等の所在が想定された。このことから、分布調査の成果等に基づき、事業予定地内における遺跡の有無、また確認された場合においてはその内容及び遺跡範囲の把握を目的として試掘・確認調査を実施することとなった。調査にあたっては対象地が広範囲であるため、工事実施予定に合わせて2か年度で対応することとし、第1年次（平成18年度）においては事業予定地東半部分の試掘調査を、第2年次（平成19年度）については事業予定地西半部分、及び周知の遺跡（日吉遺跡、一本木遺跡）の確認調査も併せて実施した。

平成18年度分の発掘調査面積は150m²で、調査期間は平成18年11月22日～平成19年1月30日、平成19年度分の発掘調査面積は251m²で、調査期間は平成19年10月15日～平成20年1月22日である。

註2 「久米町史」久米町史編纂委員会1984年～1972年に工事中箱式石棺2基が発見され、岡山県教育委員会により発掘調査が行われた旨記載されている。



第8図 トレーニング配置図 (S=1/8,000)

る。トレントは、調査対象区域内に平成18年度に15ヶ所、平成19年度に25ヶ所設定し、必要に応じて当初計画から若干のトレント位置の変更や一部拡張を行って対応した。

3. 調査の方法と調査概要

調査にあたっては、対象とする地区が広範であるため、小字名で調査区をおおまかに区分した。

年度別にみると、尾添地区（18-T-1～8）、藤地区の東半分（18-T-9～15）を平成18年度、平成19年度に藤地区的西半分（19-T-1～6）、日吉地区（19-T-7、10、14～22、24、25）、川原寺地区（19-T-8、9、11～13、23）となる。また、それぞれの調査終了後については次年度の耕作等を考慮し、入念に埋め戻し作業を行い原状に復した。

対象地の所見は、平成18年度調査区（尾添地区・藤地区的東半分）では、地形に即した小規模な水田と比較的の規模の大きい水田が混在し、小規模な区画整理が行われているところも看取された。また、平成19年度調査区（藤地区的西半分・日吉地区・川原寺地区）においては、前記に加えて大規模な区画整理がおこなわれているところも認められた。

トレントは、分布調査の成果を援用しつつ、地形等を考慮のうえ任意の位置に設定した（第8図）。規模は2m×5mを基本とし、人力により掘下げを行い遺構の有無や種類・時期の把握に努めた。加えて、工事における計画標高が示されている地区で、工事に伴い切土となる確度が高い部分については優先的にトレントを設定して調査にあたっている。

以下、各トレントの概要を調査年度ごとに述べることとするが、トレント配置図及び詳細図においては、トレント番号の前に調査年度を付している。（例：18-T-1）

平成18年度調査

T-1（第9図）

尾根端部とみられる位置に設定したトレントである。耕土直下はにぶい黄色粘質土で非常に粘性が高く、掘り下げが困難であったため、サブトレントを設定して下層の層位を確認したところ、地表から約0.6mで砂（礫）を多く含む青灰色粘質土層を検出した。遺物は1層から土師質土器の細片、須恵器、備前焼片が出土している（第11図1・2）。本トレントにおいては、遺物の出土状況やT-2の状況から遺構は存在しないものと判断した。

T-2（第9図）

T-1と同様の条件で設定した。耕土下層は粘性の高い灰色粘質土が堆積し、地表から約0.55mで砂（礫）を多量に含む青灰色粘質土層に達する。何れも自然堆積と考えられる。遺物は2層の上半から近現代の陶磁器片が数点出土したのみである。以下は無遺物層で、T-1の調査状況などから遺構は存在しないと判断した。

T-3（第9図）

このあたりは現水田が台地状に広がり、標高差はほとんどない。耕土下に薄い黄灰色粘質土、黄灰色粘質土、灰色粘質土が堆積し、地表から約0.5mで砂礫を非常に多く含む青灰色粘質土層に至る。トレント1・2の調査状況からさらにサブトレントを設定し掘り下げたところ、下層は黒褐色を呈する粘質土であることが判明したが、湧水が激しく掘削を中止した。何れも自然堆積と考えられる。遺物は1層から土師質土器片、2層から土師質土器と須恵器片が出土した（第11図3・4）。3層以下は無遺物層

である。遺構は認められなかった。

T-4 (第9図)

耕土下層は薄い明黄褐色粘質土で、その下層に灰色粘質土が厚く堆積し、地表から約0.45~0.55mで多量の砂を含む青灰色粘質土に達する。灰色粘質土以下は自然堆積と考えられた。遺構の確認はない。遺物は3・4層から須恵器片が各1点出土したのみである(第11図5)。

T-5 (第9図)

当初の設定位置がT-6と同一の条件であったため、位置を変更したトレンチである。耕土以下は現代の造成土で、この面から暗渠排水施設が掘り込まれている。下層は黒色粘質土で、土師質土器、瓦質鍋、瓦、近世～近代の陶器片が出土した(第11図6)。以下北半のみ掘下げたところ、地表から約0.35mで緑灰色を呈する砂層に達し、さらに約0.2m掘下げたが、変化が認められなかったことから遺構はないものと判断した。

T-6 (第9図)

現耕土下層に近現代の造成土と思われる灰色粘質土があり、以下西半のみ掘下げた。灰色粘質土下層は暗灰色粘質土で、何れの層からも遺物が認められ、土師器、須恵器、瓦質土器の小片の出土をみている(第11図7)が、遺構は確認できなかった。

T-7 (第9図)

水田耕土下は明黄褐色粘質土がトレンチ南半にのみ認められ、以下は灰色粘質土で、ここから東半のみ掘下げている。下層はトレンチ南半が灰色粘質土で北へ向って下降しており、北半では黒色粘質土が堆積している。地表から約0.7mまで掘り下げたが遺構は認められなかったため、計画標高から判断して以下は下げていない。遺物は弥生土器、土師器、須恵器片各1点が4層から出土している(第11図8)。

T-8 (第9図)

T-7よりやや低位に設定したトレンチである。耕土下層にはぶい黄色粘質土で、現水田に伴う造成土と思われる3層の灰色粘質土から弥生土器、土師器片各1点、須恵器片2点を出土した(第11図9)。以下は黄灰色粘質土、灰色粘質土でいずれも自然堆積層と判断された。下層の出土遺物はなく、以上のことから遺構は存在しないものと判断した。

T-9 (第10図)

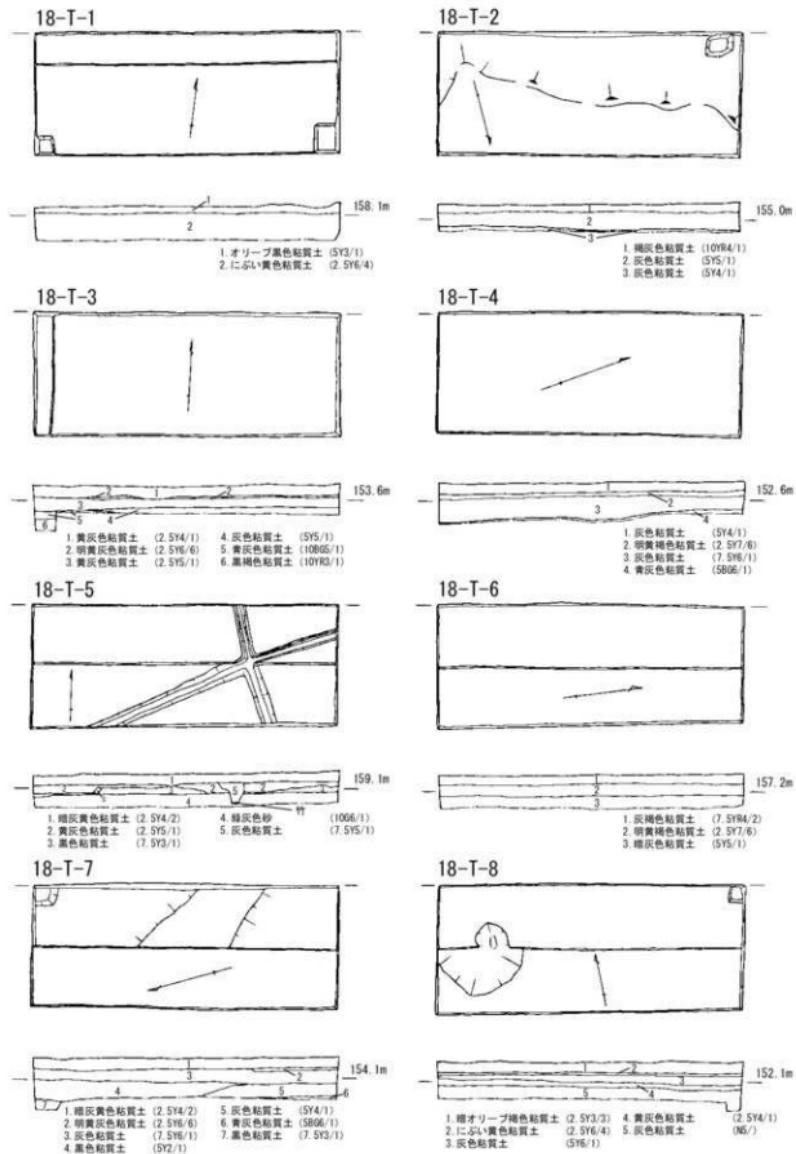
耕土直下に現水田に伴う造成土、旧水田耕土の残欠があり、耕土以下約0.5mで灰黄色粘質土、下層に礫を含む黄灰色砂質土と続くが自然堆積と思われる。旧水田の造成に伴い削平及び造成を受けた状況が確認できたが、遺構面は確認出来なかった。遺物は2層の造成土からで、弥生土器、土師器、須恵器、勝間田焼片、近世以降と思われる素焼の小皿や陶磁器片である(第11図10～12)。

T-10 (第10図)

2層の黄褐色粘質土はやや安定した面で、ここから不定形な掘り込みが認められた。当初溝等の可能性が考えられたため、サブトレンチを掘下げたが最終的に搅乱と判断した。水田化以前は桑畠であったための所為かと思われる。下層の確認はサブトレンチによる層序確認とし、地表以下約1mまで掘下げたが、変化がないためトレンチ全体に拡張していない。2層以下は無遺物層で、遺物は弥生土器の小片及び近世以降と思われる陶磁器片が出土した(第11図13～15)。

T-11 (第10図)

にぶい黄褐色粘質までは安定した堆積状況であったため、以下は北半のみ掘下げた。地表から約0.5m



第9図 トレンチ平・断面図 (1) (S=1/80)

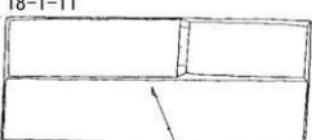
18-T-9



18-T-10



18-T-11



18-T-12

18-T-12



18-T-13



18-T-15



154.4m

1. 黄色粘質土 (7.SY4/1)
2. 明黄褐色粘質土 (2.SY6/6)
3. 灰色粘質土 (SY5/1)

151.0m

1. 黄色粘質土 (7.SY4/1)
2. 黄褐色粘質土 (2.SY5/3)
3. 明黄褐色粘質土 (2.SY6/6)

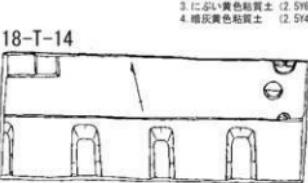
152.1m

4. 黄褐色粘質土 (2.SY5/3)
5. 暗灰黄色粘質土 (2.SY6/8)
6. 明黄褐色粘質土 (2.SY6/4)

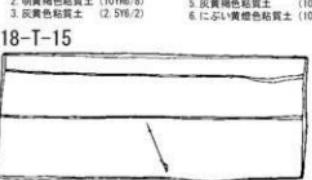
(10YR3/1)

18-T-14

18-T-14



18-T-16



153.5m

1. 黄色粘質土 (SY4/1)
2. 明黄褐色粘質土 (10YR6/8)
3. 灰黄色粘質土 (SY6/2)

153.5m

4. 暗灰黄色粘質土 (2.SY5/2)
5. 暗黄褐色粘質土 (10YR5/2)
6. にふい黄褐色粘質土 (10YR6/4)

1. 黄色粘質土 (7.SY4/1)
2. 黄褐色砂質土 (7.SY6/6)
3. にふい黄褐色粘質土 (10YR6/8)

156.1m

5. 暗灰黄色粘質土 (2.SY4/2)
6. 明黄褐色粘質土 (2.SY5/6)
7. 黄褐色粘質土 (许多) (2.SY5/6)

4. 暗灰色粘質土 (10YR4/1)

第10図 トレンチ平・断面図（2）(S=1/80)

で灰色粘質土の下端に達する。以下は部分的な掘下げに留めたものの、灰黄褐色粘質土に変わり、最終的に地表から約0.9mまで掘り下げている。耕土から土師器の細片1点が出土したのみで、以下は全て無遺物層である。調査状況から遺構は所在しないものと判断した。

T-12 (第10図)

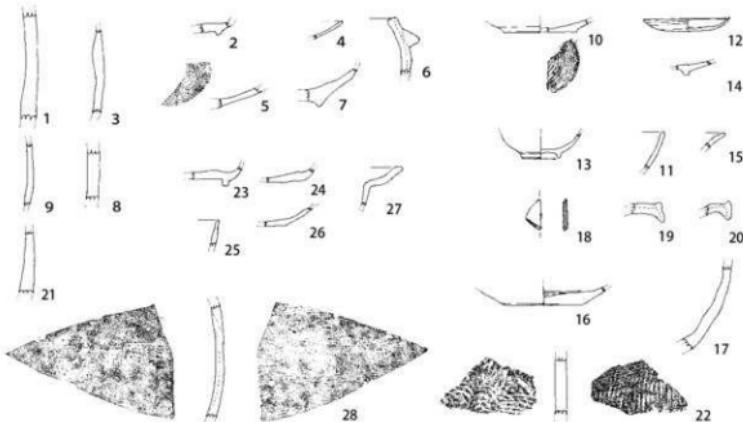
耕土下層は、明黄褐色粘質土に次いでにぶい黄色粘質土で、弥生土器、土師器、土師質の皿、須恵器片を含む（第11図16・17）。以下は西半のみ掘下げている。下層は暗灰黄色粘質土で、地表から0.6mまで下げたところで明黄褐色粘質土に変わる。T-13でみられる黄燈色粘質土と検出レベル、性状がほぼ同じであることから、以下の掘り下げは行っていない。3層以下は無遺物層である。遺構は確認されなかった。

T-13 (第10図)

灰黄色粘質土は安定して堆積し、地表から約0.5mで基盤層と考えられる黄燈色粘質土に至る。この層から北半のみさらに0.2m掘下げたが、変化がなかったため以下は掘り下げていない。遺構は認められなかった。遺物は3層及び4層からサヌカイト、弥生土器、土師器、須恵器片及び鉄滓が1点出土した（第11図18～25）。

T-14 (第10図)

明褐色砂質土層は非常によく締められており、以下は造成土と思われる黄燈色粘質土である。この面から幅約0.5m、深さ約0.25mの規則的な溝状の掘り込みが検出された。遺物を伴わないため詳細な時期は不明であるが、新しいものと思われる。以下は北半のみの掘り下げとしたが、この層と下層の暗灰黄色粘質土から土師器、土師質鍋、須恵器、近世以降と思われる素焼小皿や陶磁器片などの遺物が出土した。また、下層の黄褐色粘質土層からは土師器、須恵器の壺とみられる破片を出土している（第11図26～28）。黄褐色粘質土層面からはピットが検出された。大きいもので径30cm、深さ35cm程度のものである。ピットは遺物を伴わないため時期は不明確であるが、概ね中世の時期が考えられる。



第11図 出土遺物(1) (S=1/4)

T - 15 (第 10 図)

耕土直下は薄い粘質土を挟み、黄褐色を呈する砂礫を多く含む粘質土、若しくは砂礫層である。宮部川の氾濫原にあたると判断された。遺構は確認されなかった。遺物は耕土（1層）からのみで、須恵器及び近世以降と思われる陶磁器片が数点である。

平成 19 年度調査

T - 1 (第 12 図)

耕土直下に黄褐色砂質土、下層に灰色粘質土（旧耕土）及び黄褐色粘質土（造成土）、黄褐色粘質土（6 層、弥生包含層）の自然堆積が認められ、地表から約 0.8m で基盤層（明黄褐色粘質土）に至る。基盤層検出面において焼土面が確認された。また、トレンチの約 3/5 に渡り、基盤層を切る落ち込みが認められた（7 層）。この落ち込みについては、切り合い関係や埋土の状況から新しい時期のものと判断し、サブトレンチを検出面から 0.3m 挖り下げたが変化がみられなかったため以下の掘り下げは行っていない。

遺物は、6 層から少量の弥生土器片、それ以外から弥生土器、須恵器、瓦、近現代の擂鉢、陶器片などが散発的に出土している。

T - 2 (第 12 図)

造成土と判断される暗灰黄色粘質土（3 層）の下層に灰色粘質土、地表から約 0.5m で明黄褐色土（基盤層）に至る。変化が著しく、遺構は確認できなかった。遺物は 3 層から弥生土器、須恵器、土師器、土師質鍋などの小片が出土した（第 16 図 1）。

T - 3 (第 12 図)

褐灰色粘質土、黒褐色粘質土が耕土下に堆積し、約 0.6m でぶい黄褐色を呈する基盤層に至る。遺物は 3 層の褐灰色粘質土層から弥生土器、土師器、須恵器片などが少量出土している。遺構は検出されなかった。

T - 4 (第 12 図)

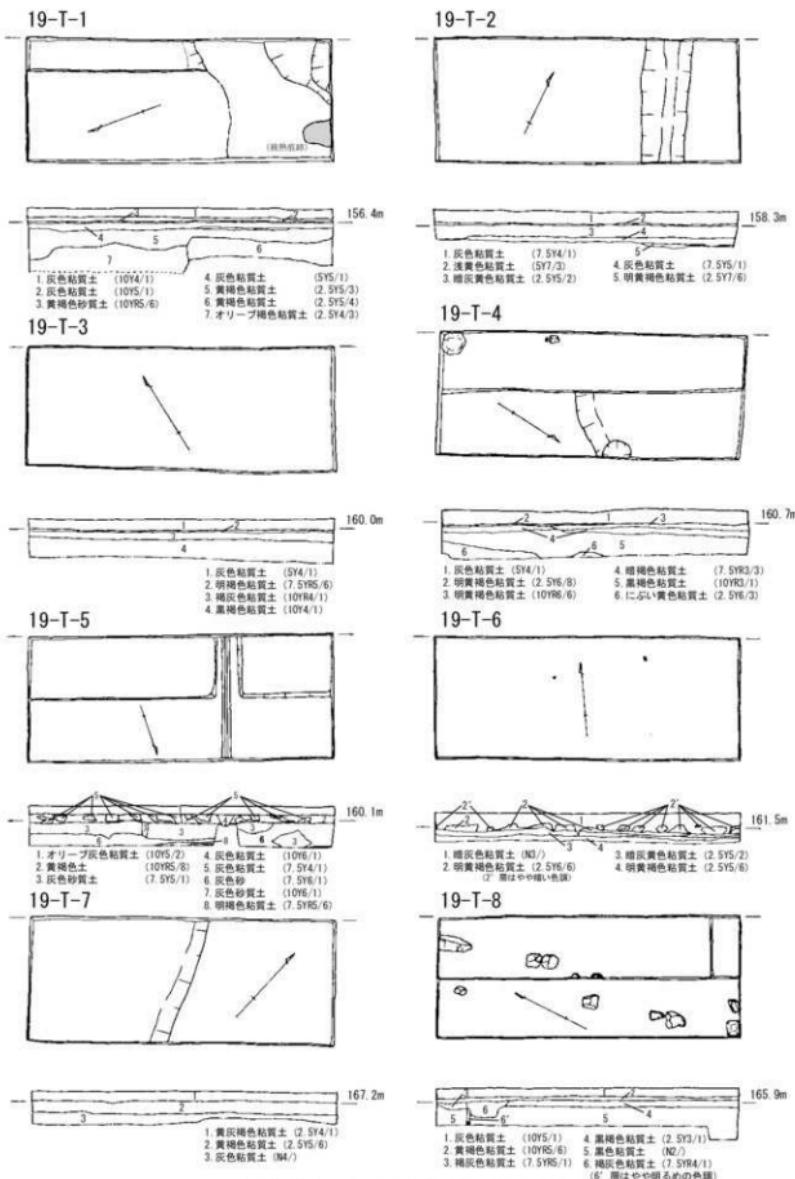
地表から約 0.3m で非常によく締まった須恵器、土師器（皿など）、土師質の鍋片など（第 16 図 2・3）、中世を主体とする遺物を含む暗褐色粘質土（4 層）が検出され、同様によく締まった黒褐色粘質土がその下層に認められる。黒褐色粘質土以下では部分的に基盤層とみなされるにぶい黄色粘質土が確認された。遺構面としては前記の 2 つの層が考えられるものの、検出に至らなかったことから遺構はないと判断された。

T - 5 (第 12 図)

耕土下層は非常によく締まった茶色の強い黄褐色土（2 層）、下層に礫を部分的に含む灰色砂層（4 層）と灰色砂質土が不整合に堆積し、地表から 0.65m で暗褐色粘質土が認められた。前年度の成果等からこれらの層は宮部川の氾濫に伴うもので、トレンチ位置は氾濫原にあたると判断した。遺構の確認はない。遺物は、2 層および 5 層から弥生土器片と近現代の陶磁器片が 1 点出土したのみである（第 16 図 4～7）。

T - 6 (第 12 図)

全体に砂を含む暗灰黄色粘質土が薄く堆積し、地表から約 0.4m で基盤層（4 層）に至る。この層は自然堆積と考えられ、古墳～古代の須恵器片 1 点が出土した（第 16 図 8）。遺構は確認されなかった。

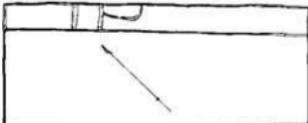


第12図 トレンチ平・断面図（3）(S=1/80)

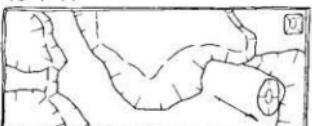
19-T-9



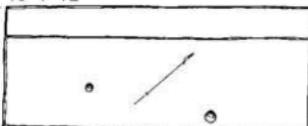
19-T-10



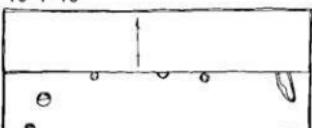
19-T-11



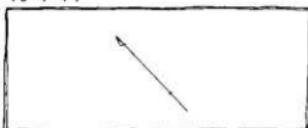
19-T-12



19-T-13



19-T-14



19-T-15



19-T-16



第13図 トレンチ平・断面図 (4) (S=1/80)

T - 7 (第12図)

T - 22で確認された遺構の範囲を確定するため当初の設定位置から変更したトレンチである。耕土下には黄褐色粘質土（現代の造成土）が0.2m程度堆積し、下層に灰色粘質土を挟み基盤層に至る。トレンチ22で認められた遺構面に伴う層は確認できず、遺構も認められなかつた。出土遺物は耕土中から須恵器片が1点出土したのみである。

T - 8 (第12図)

旧水田の畦畔に伴う石列と水路が認められ、耕土下層は褐灰色（3層）または黒褐色粘質土（4層）で、その下層に黑色粘質土（5層）がみられる。石列及び水路以外に人為的な痕跡は認められなかつた。弥生土器、土師器及び古墳時代の須恵器片が黒色粘質土層からも出土したが（第16図9・10）、流れ込みと判断した。なお、耕土からは勝間田焼の小片が出土している。

T - 9 (第13図)

耕土下層は暗オリーブ褐色粘質土で、以下明黄褐色粘質土（3層）で、暗オリーブ褐色粘質土及び黒褐色粘質土（4層）を部分的に挟む。何れも現水田の造成に伴う人為的なもので、何れの層からも弥生土器、須恵器、勝間田焼、宮部焼^{註3}の小片などの遺物が散発的に出土した（第16図11・12）。調査状況から以下はサブトレンチにより層序確認に留めた。

T - 10 (第13図)

T - 7と同じく、T - 22で確認された遺構の範囲を確定するため、当初の設定位置から変更したトレンチである。耕土下層にはT - 22の遺構面である黄灰色粘質土が安定して認められ、このため以下はサブトレンチによる層序確認に留めた。出土遺物は耕土からわずかに須恵器片と焼成不良の擂鉢片が各1点出土しているが、遺構は確認できなかつた。

T - 11 (第13図)

耕土下層は部分的に黄褐色粘質土が認められ、以下は造成層で地山に至る。耕土以下全て無遺物層で、調査状況から完全に旧地表面は削平を受けていることが判明した。

T - 12 (第13図)

トレンチ22の遺構面と近似した灰黄色粘質土層（3層）が広範に認められたため遺構面と考え、以下はサブトレンチによる層序確認とした。この面からはごく小規模なビット2を検出したが、埋土からごく新しいものと判断された。旧水田に伴うものと考えられ、これ以外は確認されなかつた。遺物は1層及び2層から弥生土器、須恵器、土師器などの小片が出土している。

T - 13 (第13図)

耕土下層に黄褐色粘質土、黄灰色粘質土が薄く堆積し、地表から約0.5mで風化岩盤、山石を多量に含む明オリーブ灰色粘質土に至る。この層の北半のみさらに0.2m掘下げたが、変化がなかつたため以下は掘り下げていない。遺構はなく、遺物は耕土から須恵器の小皿片が1点のみである（第16図13）。

T - 14 (第13図)

旧水田畦畔に伴う石材が残存しており、約0.5m掘下げた時点でトレンチ13の4層と性状が類似する層が認められた。この間は全て現水田に伴う造成土である。確認遺構はなく、遺物は4層からの須恵器片2点のみである。併せて本トレンチにより、付近に所在する周知の遺跡「一本木遺跡」の遺跡範囲

註3 宮部焼は、江戸後期から昭和20年代まで断続的にこの付近で製作及び販売された陶器の総称で、T - 9の東側尾根には最末期の窯跡が所在する。

はこの位置まで及ばないことを確認した。

T - 15 (第 13 図)

基盤層である青灰色礫層（岩盤）がすぐ確認され、水田造成に伴い削平された状況が認められた。遺構は所在しない。遺物は須恵器、素焼の小片及び判読不能の銅貨 1 点が出土した。

T - 16 (第 13 図)

基盤層は黄褐色粘質土であるが、上層はほぼ現水田に伴う造成土で、基盤層自体も削平されている状況が認められた。遺構はなく、耕土中から土師器と素焼の小片各 1 点の出土のみである。

T - 17 (第 14 図)

約 0.4m 掘下げたところで古墳～中世の遺物を含む層（5 層）が認められたため、下端を遺構面と仮定し精査したが、遺構は確認できなかった。これ以外には浅い土壤が検出されたが、切りあい関係から旧水田に伴うものと判断された。遺物は 1 ～ 5 層にわたり土師器、須恵器（焼成不良品を含む）片が出土している（第 16 図 14 ～ 17）。

T - 18 (第 14 図)

地表から約 0.5m で非常にしまりの良い自然堆積と考えられる黄灰色粘質土層（5 層）が検出されたため、以下はサブトレーナによる層序確認に留めた。耕土以下この層までは全て現代の造成土である。1 ～ 4 層で土師器、須恵器などの小片の出土をみたが、遺構はない。

T - 19 (第 14 図)

約 0.3m 掘下げた時点で灰色砂礫層（4 層）が検出され、下層は青黒色粘質土である。地形的にみて砂礫層は宮部川の氾濫に伴うものとみられ、下層の粘質土は谷地形に伴う自然堆積とみなされた。遺物、検出遺構ともない。また、本トレーナにより周知の遺跡「日吉遺跡」はこの位置まで及ばないことを確認した。

T - 20 (第 14 図)

耕土下に造成土を挟み、約 0.4m で基盤層に至る。明らかに削平された状況が看取され、遺構は所在しないと判断された。出土遺物は皆無である。

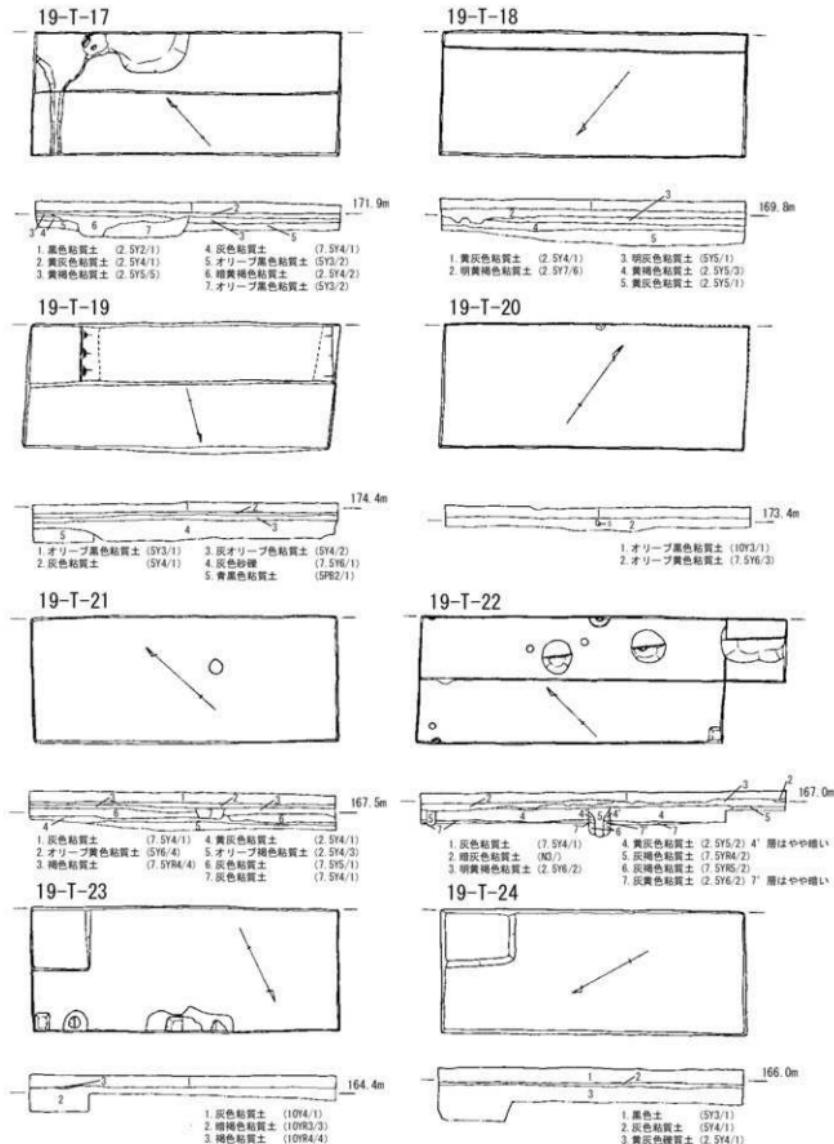
T - 21 (第 14 図)

耕土下に褐色粘質土（3 層）、礫混じりの灰色粘質土（6 層）が検出され、地表から約 0.5m でトレーナ 22 の遺構面と同一と考えられる黄灰色粘質土（4 層）がその下層に認められた。精査したが遺構は確認できなかった。遺物は弥生土器、土師器、須恵器片若干が耕土から出土したのみである。

T - 22 (第 14 図)

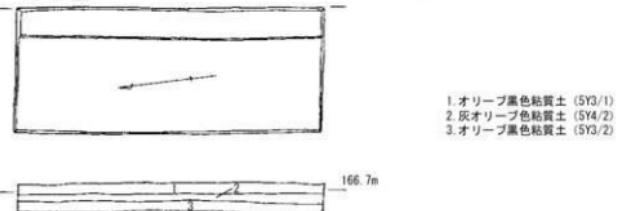
低位段丘上位の台地状を呈する平坦面に設定したトレーナである。暗灰色粘質土、明黄褐色土が整地層として検出され、地表から約 0.2m で黄灰色粘質土がみられる。この層上端が遺構面で、ピットや柱穴が検出された。規模の大きな柱穴は、規模・形状が近似し、径 0.5 ～ 0.6m でいびつな円形のプランを持つ。また、深さは検出面から 0.3 ～ 0.4m であるが、本来はさらに 0.2m 程度の掘り方をもつものとみられる。遺物から時期は古代と考えられる。そして、トレーナ内西側には連続する柱穴が検出されなかつたため東側を一部拡張したところ、不定形なプランを確認した。現時点では拡張範囲が限られてゐるため土壌としたが、連続する柱穴の可能性も考えられる。

なお、遺物は上記の黄灰色粘質土検出面（2 層及び 3 層）に集中して少量の弥生土器、土師器片と須恵器片、鉄滓が 1 点出土し（第 16 図 18 ～ 20）、ピット（第 16 図 21）及び土壤からも各 1 点出土した。



第14図 トレンチ平・断面図(5) (S=1/80)

19-T-25



第15図 トレンチ平・断面図（6）(S=1/80)

T-23 (第14図)

低位段丘上に設定したトレンチである。耕土以下は暗褐色粘質土で比較的安定した面である。この層を切り込んで不定形の落ち込みが認められたが、プランが明確に検出できないことから搅乱と判断した。以下は部分的なサブトレンチによるものとし、耕土から約0.6mまで掘下げたが変化はなく、は場計画標高との関係から以下は掘り下げていない。遺物は弥生土器、須恵器、土師器などの小片が各層から散発的に出土した。

T-24 (第14図)

トレンチ23と同じく低位段丘上に設定した。耕土以下は黄灰色を呈する礎質土（3層）で、層序確認のため部分的にサブトレンチにより地表から約0.8mまで下げたが、変化がないため以下は掘り下げていない。調査状況から宮部川の氾濫原にあたると考えられる。また、出土遺物は耕土からの土師質土器細片の出土のみである。

T-25 (第15図)

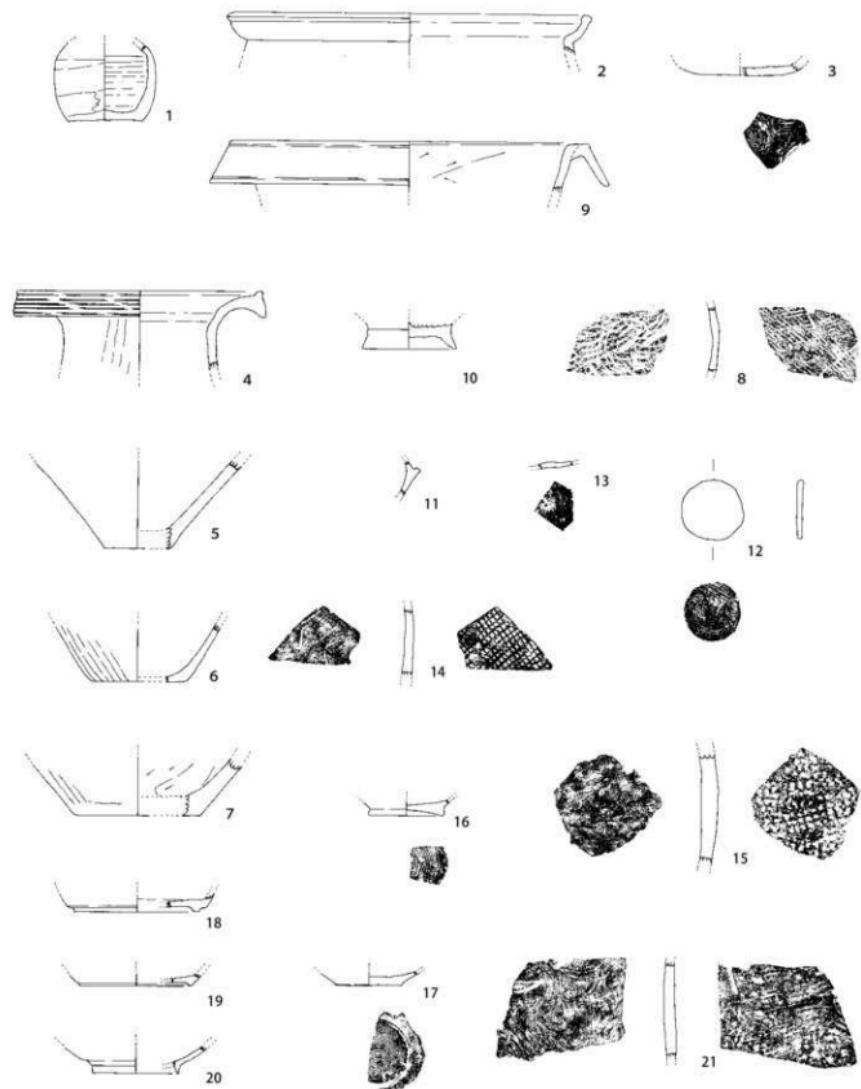
耕土下層は灰オリーブ色粘質土で小さな礎を比較的含む整地層と判断した。下層はややしまりのあるオリーブ黒色粘質土の堆積が認められ、以下はサブトレンチによる確認である。約0.15m下げたが変化がなかったため以下は掘り下げていない。遺物は弥生土器片2点、須恵器片1点が出土した。

4. まとめ

宮部地域は、宮部川に沿って北西から南東方向に開ける、狭ながら完結した谷地形である。これまで発掘調査等もほとんど行われていなかった状況から、調査前では、分布調査における遺物の採取状況や、河岸段丘上に微高地状の地形がみられるなどのことからある程度の遺跡の所在が考えられた。このため、対象区域全域に2年度にわたり、40か所のトレンチを設定して遺跡の確認に努めた。

しかしながら、各調査トレンチにおいては、遺物は散発的に出土するものの、遺構については18年度調査区のうち蔭地区において1か所（T-14）、19年度調査区において蔭地区及び日吉地区的トレンチ各1か所（T-1、T-22）で確認されたに過ぎず、対象地全体がかなりの部分において大規模な改変を受けていることが判明した。特に蔭地区においては顕著であり、明治期に行われた耕地整理事業の結果と考えられる。

18年度調査区のT-14で確認された遺構の時期については、遺構に伴う遺物はないが、発掘及び遺構の検出状況から概ね古代～中世のものと判断される。遺構の広がりについては、より低位の箇所に範囲確認をおこなっていないため判断は困難であるが、地形的条件から現水田より高位には及ばず、低位



第16図 出土遺物（2）(S= 1/4)

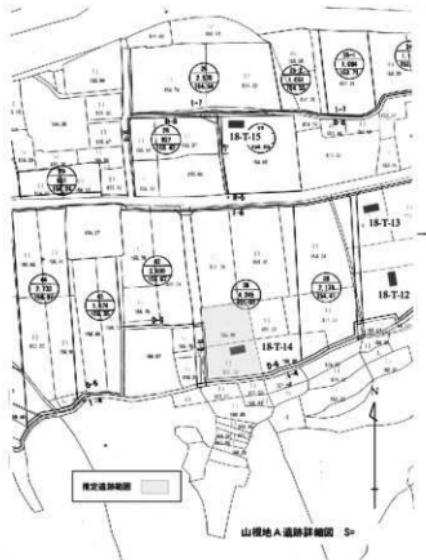
な方向には広がる可能性があると考えられる（山根地A遺跡：第17図）。また、19年度調査区のT-1において確認された遺構は、時期としては出土遺物から弥生時代としているが、他に明確な遺構がみられなかつたことから断定は困難である。加えて、遺構の広がりについても、同様の理由から限定的に判断せざるを得ない（山根地B遺跡：第18図）。そして、T-22で確認された遺構の時期については、前述のとおり概ね古代に該当するものと現時点では認識される。そして、遺構の広がりについては、周辺に設定したトレーニチでは遺構がいずれも確認できなかつたことから、T-22周辺に限られ、限定的であると判断される（下石屋遺跡：第19図）。

今回の調査から考えられる遺跡のあり方としては、基本的に現在確認されている遺跡の状況を大きく覆すものではないが、従来確認されていなかつた宮都川の河岸段丘上にも遺跡の所在がみとめられたことは、新しい知見とし得るものである。

出土遺物については、弥生～中世の遺物が多くを占める。ただし、勝間田焼など明確に中世と見なすことのできる遺物はごく少ない。出土状況も、多くが自然堆積と考えられる層からの出土で、総量で整理箱3箱と調査対象面積に対して量的にも少量であった。ほとんどが周辺からの流れ込みや土地造成に伴うものと考えられる。

ただし、18年度調査区のT-14に隣接するT-13において、そして19年度調査区T-22では、各トレーニチから少量ながら鉄滓が出土していることには注目すべきと思われ、今回確認された遺跡は鉄生産と何らかの関連をもつ性格を有する遺跡である可能性がある。

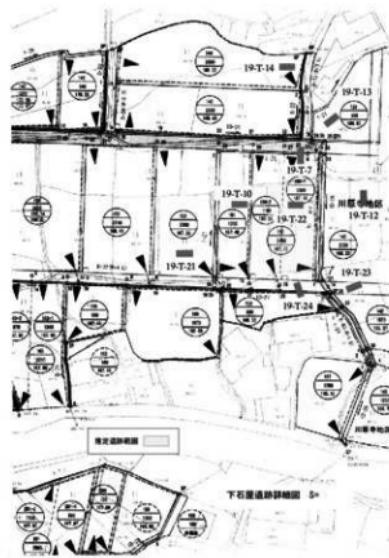
なお、本調査の成果からは場整備計画範囲内及び付近に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地2遺跡（日吉遺跡、一本木遺跡）については、今回の整備計画範囲内には及ばないことが判明した。



第17図 新規発見遺跡範囲図(1)



第18図 新規発見古跡範囲図(2)



第19図 新規発見古跡範囲図(3)

第4章 中北下地区試掘調査

1. 調査位置と周辺の遺跡

津山市中北下地区は、行政機関や事業所、金融機関等が集中し、現在での久米地域の中心部である。吉井川支流である久米川の中流域で、吉井川に向けて東流する久米川が山間部から中北下以東の平野部へ大きく広がる地点である。平野部のはば中心をJR姫新線が、久米川の南側には近世の出雲往来および現代の国道181号線が並行して走る。調査位置は久米川左岸（北側）にあたり、小字名を岡と称する。小規模な低位段丘の最低位部にあたり、久米川からの比高は約3m程度まで、ごく平坦な地形を示す。

調査地周辺において弥生時代に属する遺跡としては、寺城遺跡（034）で後期の堅穴式住居址が確認されている^{註1}。また、大野尾遺跡（181）、荒神遺跡（194）で弥生土器の散布が認められているものの詳らかではない。

古墳時代になると、久米川左岸においては磯尾古墳（029）、岡1～5号墳（175～179）、寺岡1号墳（180）、右岸では西の山古墳（033）、長谷1～10号墳（182～191）、高徳2号墳（196）などの古墳が確認されている。これらのうちでは、規模としては墳長約57mを測る本流域最大規模の前方後円墳である岡5号墳が突出する。北東に所在する三成4号墳に後出する首長墓とみられているが、今後の検討

註1 「改訂版 岡山県遺跡地図」 岡山県教育委員会 2003年 以下、記述についてはこれに従っている。



028 亀山城跡 029 磯尾古墳 030 磯尾営址 033 西の山古墳 034 寺城遺跡 174 年末堀址 175～179 岡1～5号墳
180 寺岡1号墳 181 大野尾遺跡 182～191 長谷1～10号墳 192 長谷遺跡 193 長谷中世墓 194 荒神遺跡 196 高徳2号墳

第20図 調査地および周辺遺跡分布図 (S=1:20,000)

^{ながたに}を要する^{註2}。また、長谷遺跡（192）では須恵器の散布がみられ、古墳～平安期の時期が与えられている。

中世以降では、亀山城跡（028）、磯尾営址（030）、年末堀址（174）などの城郭遺構がみられる。いずれも平野部を見下ろす尾根や丘陵上に築かれた中小規模の城郭で、西方の岩屋城との関連が示唆されているものである。そして、長谷中世墓（193）は室町期と推定されるもので、10 m × 75 m の基壇上有2つの方形基壇がのるものである。

以上概観したが、周辺地域を含めてもかならずしも密度は高くはないものの、遺跡の点在する状況をうかがうことができよう。

2. 調査経過

中山間地域総合整備事業（久米地区）実施に伴い、ほ場整備事業が予定されていた岡田地予定地は、これまで遺跡の所在は知られていなかった。しかし、分布調査も未了であったことから津市教育委員会は事業計画提示後に予定地の分布調査を実施した。

その結果、須恵器片の散布がみられ、遺跡の存在する可能性が認められた。このことから事業部局と協議をおこない、ほ場整備事業との調整を行なうために遺跡の有無及び内容、また遺跡範囲の確認を目的として試掘調査を実施することで合意した。

試掘調査は、事業対象地の面積等から單年度で対応することとし、実施時期については、他事業（経営育成基盤整備事業）の確認調査と実施期間が並行するため、工事（平成20年度）の前年度に対応することで事業部局と調整した。このため、平成19年度分の経営育成基盤整備事業の試掘・確認調査終了後、引き続き本地区的調査をおこなった。

全体の調査面積は70 m²で、調査期間は平成20年1月29日～平成20年2月25日である。

3. 調査の方法と調査概要

調査着手前の対象地の所見は、旧来の地形に即したごく小規模な水田と、土地所有者による比較的大規模な区画整理が行われている水田が混在した状況が看取された。

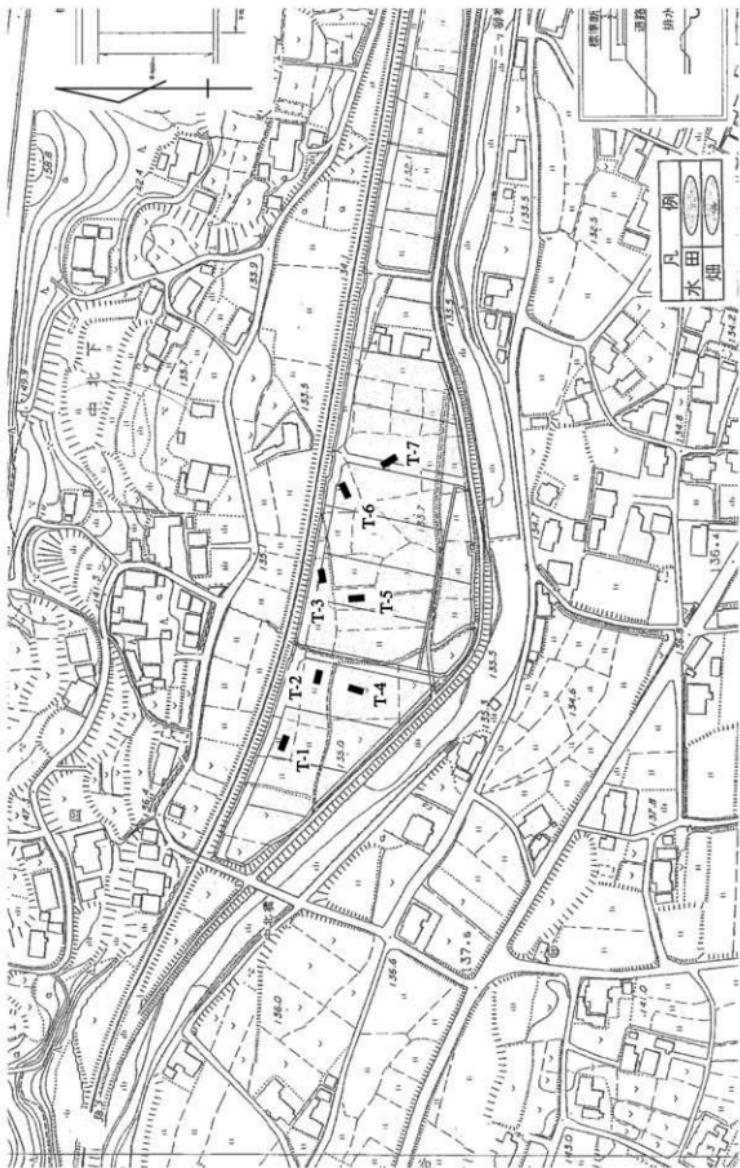
調査は、分布調査の成果を援用しつつ、地形や工事計画標高等を考慮のうえ任意の位置にトレチを設定し、人力により掘下げを行い遺構の有無や種類・時期の把握に努めた。また、調査実施時には工事計画標高が既に示されていたため、切土となる箇所についてもトレチ位置を設定する際配慮している。

トレチの規模は2m × 5mで、調査対象区域内に7ヵ所設定した（第21図）。また、調査終了後は次年度耕作予定がなかったことから現状でも可との意見が地権者からあったが、付近が通学路にあたっていることから安全面を考慮して埋め戻しをおこなった。埋め戻しにあたっては、砂礫が多くいたためランマーを主用して作業を行い原状に復した。各トレチの概要は以下のとおりである。

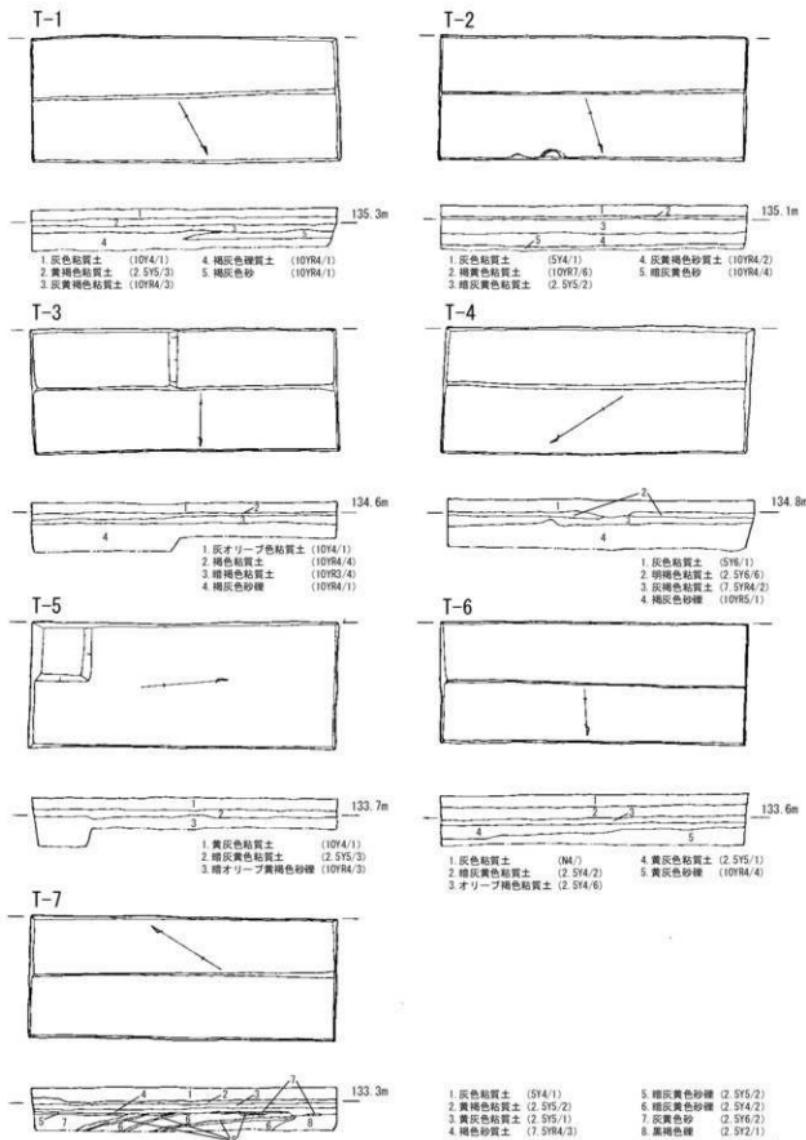
T-1（第22図）

耕土下に黄褐色粘質土、灰黄褐色粘質土及び褐灰色礫質土が堆積し、間に砂層（5層）を挟む。何れも自然堆積と考えられる。褐灰色礫質土はサブトレチによる確認で、ほ場計画標高を考慮し地表から約0.7mまで掘り下げている。出土遺物は3層から弥生土器の小片が1点出土したのみである。遺構は

註2 2009年3月にくらしき作陽大学・澤田秀実ほかにより墳丘測量調査が行われた。これまで築造年代は5世紀代とされているが、測量成果からみると四世紀代に遡る可能性が高い。調査担当者の澤田さん教示による。



第21図 トレンチ配置図 (S=1:3,000)



第22図 トレンチ平・断面図 (S=1/80)

確認できなかった。

T-2 (第22図)

耕土下層は褐黄色粘質土、暗灰黄色粘質土と続く。以下はサブトレンチによる確認で、砂層を挟む灰黃褐色砂質土となり何れも自然堆積層と考えられる。暗灰黄色粘質土以下は無遺物である。トレンチ1と同様に約0.7mまでサブトレンチを掘り下げたが、最下層に変化がなかったため終了とした。遺物は3層から弥生土器、須恵器、陶器片、及び軟質の土人形（第23図1・2）が出土している。遺構はない。

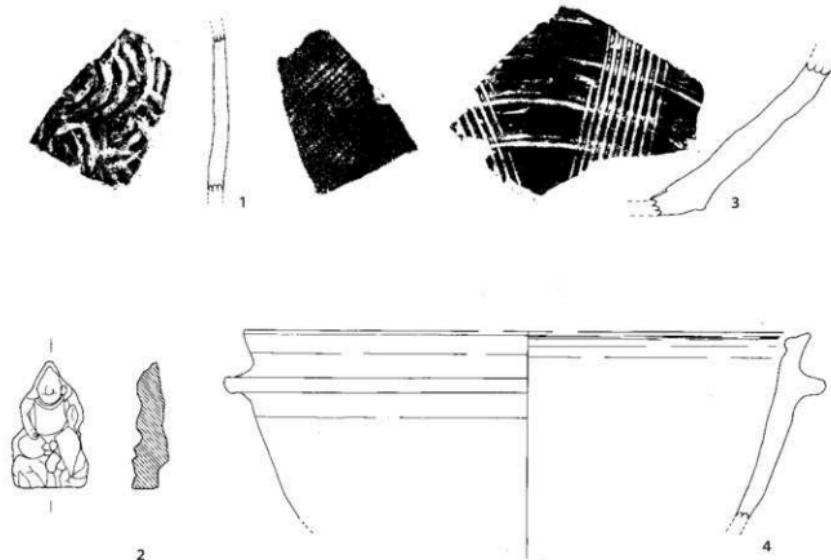
T-3 (第22図)

耕土下層は褐色粘質土、暗褐色粘質土の何れも造成層である。下層は暗褐色の砂疊層で自然堆積である。は場計画標高を考慮して約0.8mまでサブトレンチにより層序を確認したが変化がみられなかった。遺構は検出されていない。

遺物は1層から備前の擂鉢、3層から須恵器片、4層から弥生土器及び土師質銅片が出土した（第23図3・4）。

T-4 (第22図)

耕土下層は比較的安定した灰褐色の粘質土（3層）で、それ以下は砂疊層となり、サブトレンチによる層序確認である。約0.8mまで掘り下げたが、変化は認められなかった。出土遺物、遺構ともに皆無である。



第23図 出土遺物 (S= 1/2)

T - 5 (第22図)

耕土下層は薄い暗灰黄色粘質土層で、以下は砂礫層である。部分的に層序確認のため約0.8mまで掘り下げている。遺物は1層から須恵器片、3層から弥生土器片各1点が出土したが、遺構は確認されなかった。

T - 6 (第22図)

トレーナー5と同一水田であり、近年所有者による土地の改変を受けている。耕土下には約0.2mの造成層があり、その下層に旧水田に伴う鉢床（3層）がある。以下自然堆積と考えられる黄灰色粘質土、砂礫層と続き、何れも無遺物層である。また、砂礫層以下は部分的な掘り下げによる層序確認に留めている。遺構は確認できず、遺物は須恵器及び陶器の小片が出土した。

T - 7 (第22図)

耕土下は黄褐色粘質土、黄灰色粘質土と続き、以下は旧耕土由来と思われる褐色砂質土、そして砂礫層である。砂礫層検出面以下はサブトレーナーによる層序確認である。砂礫層中には、水中の付着物に伴う黒色に変色した部分が繊維状に数条認められた。出土遺物は皆無で、遺構についても認められなかった。

4.まとめ

調査位置付近は比較的遺跡の分布が希薄で、詳細な分布調査も未済であった地域であったため、発掘調査としては初めての調査事例となった。

調査前の分布調査段階では、T-1～T-3付近に遺構が考えられた。調査結果では遺構は認められなかつたものの、これらのトレーナーは河岸段丘上の平坦面の端部にあたる位置であり、平坦部はより山側に向かって広がってゆくことから、現集落と重なるより上位の位置において遺跡が所在する可能性があるのではないかと思われる。なお、T-4以降については、久米川の氾濫原であったことを示している。

出土遺物からみると、時期は弥生～中世にわたるものの中量はごく少量で、久米川の旧河道あるいは周辺からの流れ込み、もしくは土地造成に伴うものと判断された。

今次の調査により、工事予定区域において遺跡は所在しないことが判明したが、付近には相当の規模を有する古墳等も所在することから、上記の理由により引き続き注目すべき地域であると考えられる。

図 版



調査位置遠景（南から）



トレンチ1（南西から）



トレンチ2（南西から）



トレンチ3（南から）



トレンチ4（東から）



トレンチ5（北西から）



トレンチ6（南から）



トレンチ7（北から）



トレンチ8（西から）



トレンチ9（北東から）



トレンチ10（南東から）



トレンチ11（南東から）



トレンチ12（南西から）

図版3



トレンチ 13 (南東から)



トレンチ 14 (北西から)



トレンチ 15 (北西から)



トレンチ 16 (北西から)



作業状況 (1)



作業状況 (2)



出土遺物



尾添地区調査位置全景（北から）



菖地区調査位置全景（東から）



トレンチ1（北東から）



トレンチ2（東から）



トレンチ3（東から）



トレンチ4（北から）



トレンチ5（西から）



トレンチ6（南から）



トレンチ7（南から）



トレンチ8（東から）



トレンチ9（東から）



トレンチ10（北から）



トレンチ11（南東から）



トレンチ12（南東から）



トレンチ13（東から）



トレンチ14（西から）



T-14 ピット掘下げ状況（南西から）



トレンチ15（西から）



篠地区調査位置全景（西から）



日吉地区調査位置全景（南西から）



川原寺地区調査位置全景（西から）



トレンチ1（北から）



トレンチ2（南西から）



トレンチ3（西から）



トレンチ4（北から）



トレンチ 5 (東から)



トレンチ 6 (北東から)



トレンチ 7 (南西から)



トレンチ 8 (南東から)



トレンチ 9 (南西から)



トレンチ 10 (南東から)



トレンチ 11 (北東から)



トレンチ 12 (北東から)



トレンチ 13 (東から)



トレンチ 14 (東から)



トレンチ 15 (北西から)



トレンチ 16 (北東から)



トレンチ 17 (南から)



トレンチ 18 (北東から)



トレンチ 19 (北西から)



トレンチ 20 (北東から)



トレンチ 21 (北西から)



トレンチ 22 (北西から)



トレンチ 22 ピット掘り下げ状況 (南東から)



トレンチ 23 (西から)



トレンチ 24 (南西から)



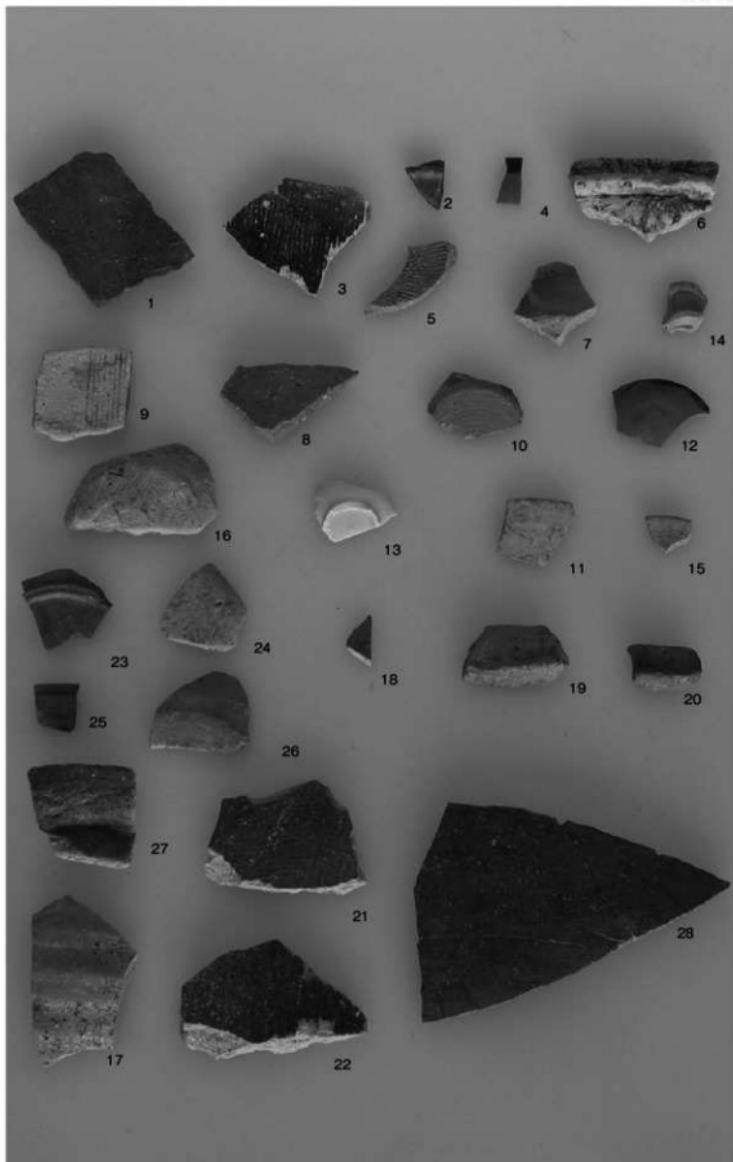
トレンチ 25 (南から)



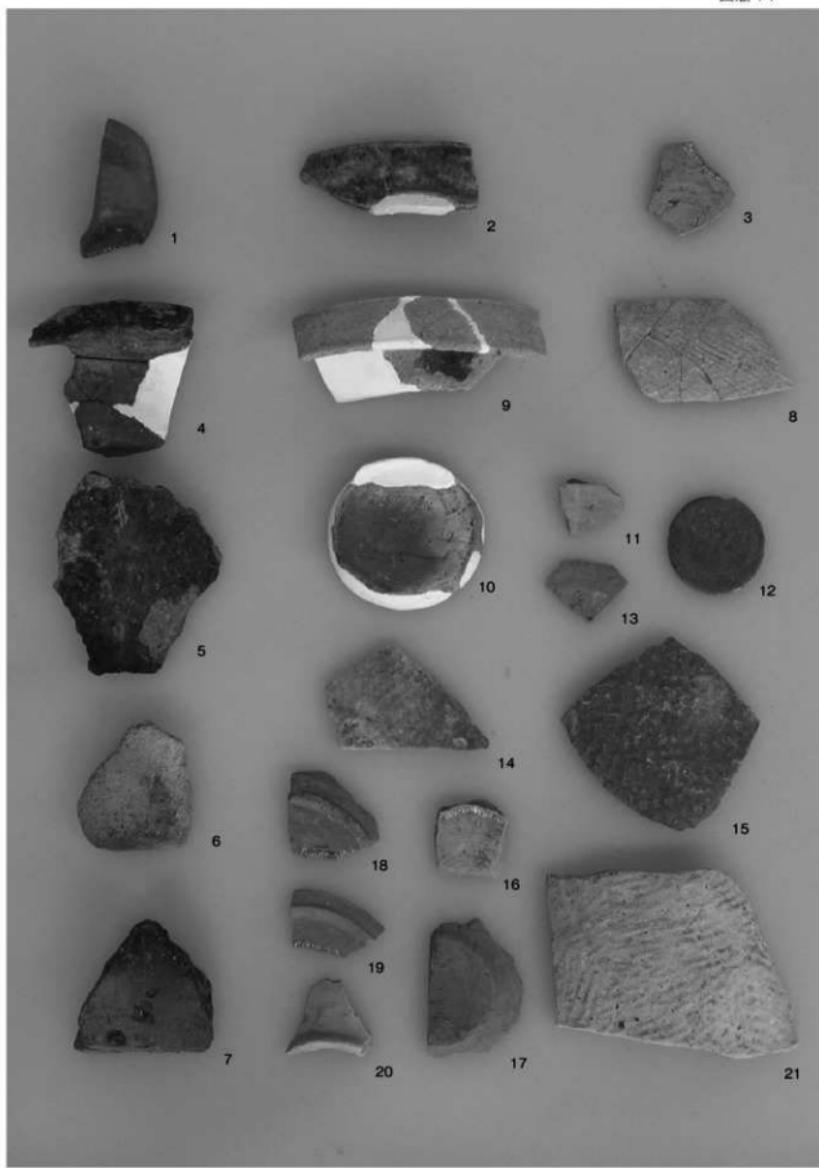
作業状況 1



作業状況 2



出土遗物 (1)



出土遗物 (2)



中北下地区試掘調査 調査位置全景（北西から）



トレンチ 1（東から）



トレンチ 2（東から）



トレンチ 3（西から）



トレンチ 4（北東から）



トレンチ 5 (北から)



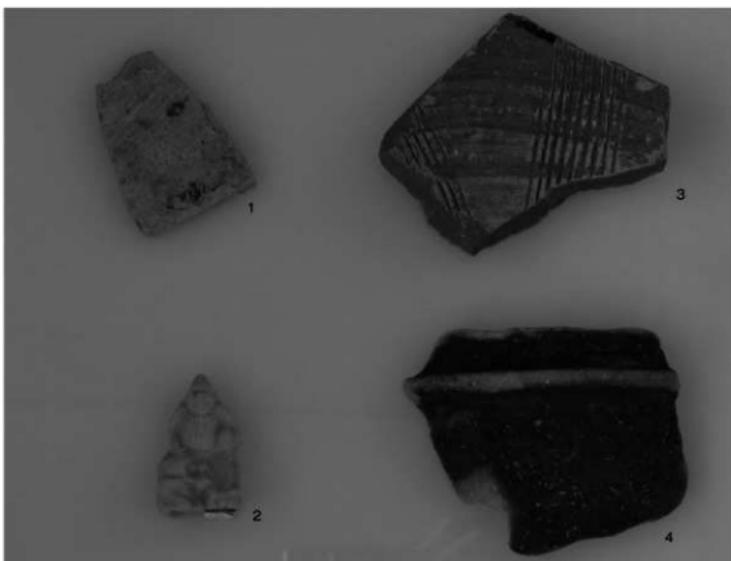
トレンチ 6 (西から)



トレンチ 7 (南東から)



作業状況



出土遺物

報告書抄録

県営ほ場整整備事業（久米地区）
に伴う試掘確認調査報告書

津山市埋蔵文化財調査報告第 80 集

2010年3月25日 発行

発行 津市教育員会文化財課
津山弥生の里文化財センター
〒 708-0824
岡山県津山市沼 600-1 番地
TEL 0868-24-8413
FAX 0868-24-8414
印刷 三勝
